日　影　平

—縄文時代後・晩期，中世を中心とした—

1983.3

長野県下伊那郡根羽村教育委員会

日影平遺跡群

—縄文時代後・晩期，中世を中心とした—

1983.3

長野県下伊那郡根羽村教育委員会

序

農地の土地基盤を整備し，経営の近代化を計り，農業の振興を図る為，昭和56年度事業として，本村で初めての農業構造改善事業が，地域住民の総意によって，日影平（別名：平）地区で実施されることになりました。

此の地域は矢作川の上流で，国の天然記念物の大杉が有り土地も肥沃で，先住民族の住居跡として，以前から土器・石器が畑地から散出し，注目をされていた所であり，緊急に発掘調査の必要が生じた次第であります。勿論，此の様な事業は今回が初めてもあり，事務的にも県の指導を得て実施を始めましたが，国の補助事業として実施する時間的な余裕が無く，結局，全発掘調査事業を村単独事業として実施する事になった次第であります。

調査に当っては，以前根羽小学校に赴任していました考古学に深い造詣のある佐藤甦信先生を無理にお願いし，夫々の調査員，作業員の方々の努力と土地所有者のご理解とご協力により，梅雨，猛暑の時期にもかかわらず，外業を無事終了し，以後内業の資料の整理についても全面的に佐藤先生にお願いして報告書の作製も此の調査結果を集録したもので，特に出土品の中には学術的にも価値のある物が多く，記録保存の為，大切な資料であると思います。

初めての発掘調査事業でありましたが，関係されました多くの皆様の御協力によりまして，無事終了出来ました事を衷心より御礼申し上げ，序といたします。

1983年3月

根羽村教育委員会

教育長　　菅　沼　真佐人

例　　言

1. 本書は長野県下伊那郡根羽村月瀬日影平における農業構造改良事業に伴う日影平遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本書は，資料提供に重点をおいて編集したものであり，編集は佐藤が担当した。また，執筆は歴史的環境の中世を浅井，縄文時代石器一覧表は牧内が，他は佐藤が担当した。

3. 遺構実測図作成は佐藤・牧内が，遺物の作図は佐藤，拓影は牧内が，製図は田口が分担し，写真は佐藤が担当した。

4. 遺構実測図のうちピット内または横の数字は床面からの深さをcmで，遺物出土状況は床面からの高さをcmで示し，縮尺は図示してある。

5. 遺物は根羽村歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序……1
例　言……2
目　次……2
遺物図目次……3
Ⅰ　環　境……5
　1. 自然的環境……5
　2. 歴史的環境……7
Ⅱ　発掘調査経過……8
Ⅲ　発掘調査結果……13
　(Ⅰ) 縄文時代……15
　　1. 住居址……15
　　(1) 縄文前期……15
　　(2) 縄文後期・晩期……16
　　2. 集石群……26
　　3. 土　坑……28
　　4. 遺構外の縄文時代遺物……31
　　5. 日影平遺跡出土縄文時代石器一覧表（表2）……31
　(Ⅱ) 中　世……35
Ⅳ　まとめ……39
遺物図……42
図　版　Ⅰ遺跡・Ⅱ遺構・Ⅲ遺物・Ⅳ発掘スナップ
調査組織

挿　図　目　次

図1　日影平遺跡位置図及び根羽村遺跡図（1：50,000）……6
図2　〃　詳細図（1：20,000）……7
図3　〃　発掘調査区域……9
図4　〃　遺構分布図……14
図5　〃　32号住居址，土坑23号・24号・25号・27号……15
図6　〃　37号・38号住居址，土坑20号・28号，建物址Ⅲ……16
図7　〃　1号・2号・住居址・土坑1号・2号……17
図8　〃　Ⅲ配石群（3号住居址）……18
図9　〃　4号住居址・土坑6号……18
図10　〃　5号住居址……19
図11　〃　21号住居址，土坑4号……19
図12　〃　22号　〃　，土坑5号……20
図13　〃　23号　〃　，土坑6号……21
図14　〃　31号　〃　……21
図15　〃　33号　〃　……22
図16　〃　34号　〃　……22
図17　〃　35号　〃　，Ⅳ集石群……23
図18　〃　36号　〃　，土坑26号・27号……24
図19　〃　12号　〃　，土坑13号・38号・37号……25
図20　〃　11号　〃　……25
図21　〃　Ⅰ調査区上層集石群……27
図22　〃　Ⅰ南集石群……26
図23　〃　土坑29号……28
図24　〃　土坑9号・10号・11号・12号……28
図25　〃　24号住居址……35
図26　〃　建物址Ⅰ号（25号住居址）……36
図27　〃　建物址Ⅱ号……37

遺物図

図28の1　日影平32号住居址出土遺物（1：4）……42
図28の2　〃　37号　〃　〃　……42
図29　〃　1号　〃　〃　……43
図30　〃　4号　〃　〃　……43
図31　〃　2号　〃　〃　……44
図32　〃　3号住居址（Ⅲ配石群）出土遺物（1：4）……45
図33　〃　5号　〃　〃　……45

図34　日影平21号住居址出土遺物（Ⅰ）（1：4）……46
図35　〃　〃　（Ⅱ）　〃　……47
図36　〃　22号　〃　（Ⅰ）　〃　……48
図37　〃　22号　〃　（Ⅱ）　〃　……49
図38　〃　23号　〃　〃　……50
図39　〃　25号　〃　〃　……50
図40　〃　31号　〃　〃　……51
図41　〃　33号　〃　〃　……52
図42　〃　34号　〃　〃　……52
図43　〃　35号　〃　（Ⅰ）　〃　……53
図44　〃　（Ⅱ）　〃　……54
図45　〃　36号　〃　〃　……55
図46　〃　38号　〃　（Ⅰ）　〃　……56
図47　〃　38号　〃　（Ⅱ）　〃　……57
図48　〃　12号　〃　〃　……58
図49　〃　Ⅰ南集石群出土遺物　〃　……58
図50　〃　11号住居址出土遺物　〃　……59
図51　〃　Ⅰ集石群・Ⅰ集石土坑　〃　……60
図52　〃　Ⅱ集石群・Ⅱ集石土坑・Ⅲ集石群出土遺物（1：4）……61
図53　〃　土坑出土縄文時代遺物　（1：4）……62
図54　〃　遺構外出土縄文時代遺物　〃　……63
図55　〃　出土大形石器　〃　……63
図56　〃　24号住居址及び周辺出土遺物　〃　……64
図57　〃　建物址Ⅰ号（25号住居址）Ⅲ調査区3号住居址上層，周辺出土遺物（1：4）……65
図58　〃　建物址Ⅱ号出土遺物　（1：4）……66
図59　〃　建物址Ⅲ号　〃　……67
図60　〃　土坑出土遺物　〃　……67
図61　日影平遺跡出土小形遺物及び混入土器片（1：2.5）……68

Ⅰ　環　　境

1. 自然的環境

日影平遺跡は長野県下伊那郡根羽村月瀬小字日影平に所在し，根羽村5688番地を中心に約東西300m，南北50～80mの範囲に遺跡は展開し，根羽川の南岸　標高545～550mの沖積段丘面に立地している。

遺跡のある根羽村は長野県の最南端に位置し，南は愛知県北設楽郡，西は岐阜県恵那郡と境している。周囲は1000～1100m級の山に囲まれ，その間を北から小川川，東から小戸名川，南より桧原川が流れこれらが村の中央部で合流し，根羽川となって西流し，北に隣接する平谷村を発する上村川と合流し矢作川となる。村の集落は，それらの川に面した谷あいの小台地に点在し，三つの川の合流点は，やや開けた台地となり，村の中心地をなし，根羽の町が形成され，ここに村の諸機関・商店が集中している。小川川に沿って国道153号が南下し，村の中央部で西に折れ，根羽川に沿って大きく迂回して稲武にはいり，南西に進んで名古屋市に，また村の中央部から南に分かれる道は豊橋に至っている。

根羽の山は基盤に花崗岩，領家変成岩，その上に第三紀層がのり，茶臼山・丸山・池ノ平・ムネバタの山頂に第三紀を貫ぬいて墳出した玄武岩がみられている。また年間多雨量地域で杉・桧の成長は著しく，他の下伊那地方の山林にみられない美しい林相を呈している。

遺跡の微地形をみると，南は標高728mの山裾の急な傾斜面がせまっており，北は根羽川を堅い基盤によって北に大きく迂回させ，半月状の沖積台地を形成している。東側は高く，西にいくに従って低い地形をなすが，発掘調査地点の北の川に面してやや高く，中央部が低くなり，また山麓は東西方向に湿地帯となっている。現在の日影平の集落は川に面す北側に東西方向に並んで形成されており，古い時代から引続いてここに集落が形成されたものとみられる。遺跡の東端には国指定の天然記念物の月瀬の大杉がある。地上1.5mの高さの周囲12.79m，高さ約49m，樹令1800年余とされる県下第一の大木である。

遺跡の地層と根羽川の侵蝕断面でみると，基盤に花崗岩があり，その上に河蓋堆積による砂礫層があり砂層がのる。上層は砂質の腐植土となる。

発掘調査区域は緩い傾斜面に造成された水田であり，高さ20～50cmの石垣で区切られている。このため水田造成時に上方は削られ，下方は埋立となり，遺構の破壊，遺物の混入も多くみられた。

1. 日影平遺跡 2. 日向遺跡 3. 大曽礼遺跡 4. 小野遺跡 5. 神遺跡 6. 森の前遺跡 7. 道下遺跡 8. 十王野遺跡 9. 山吹遺跡
10 小川遺跡 11 中野遺跡 12 但玄塚遺跡 13 横窯遺跡 14 鶴塚 15 市ノ沢遺跡 16 高橋遺跡 17 向黒地遺跡 18 森沢遺跡
19 新井遺跡 20 桧原神社付近遺跡 21 桧原遺跡 22 浅間遺跡 23 小戸名遺跡 24 興野遺跡

図1　日影平遺跡位置図及び根羽村遺跡図（1：50,000）

（折山・茶臼山遺跡を除く）

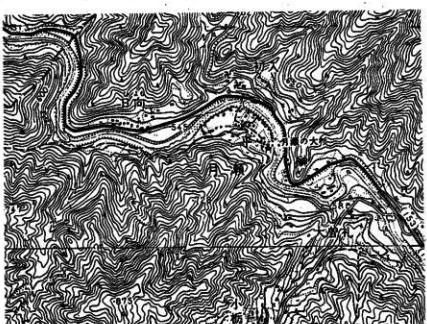


図2　日影平遺跡詳細図（1：20,000）

2　歴史的環境

根羽村の遺跡を概観すると川に沿った日照の良い谷あいの小台地・山麓に分布し，現在知られているのは26遺跡である。これら遺跡を川筋に従ってみると，小川川沿には，北から折山・高橋・市之瀬・縫塚・横旗・信玄塚・中野・小川・山吹遺跡と続いている。桧原川では桧原・桧原神社付近遺跡・小戸名川・浅間川に沿って小戸名・萄野・浅間遺跡があり，小戸名川の源流をなす茶臼山は先土器時代の遺跡として知られている。これらの川が合流して根羽川となる付近は比較的広く開け，遺跡が集中してくる。東から向黒地・森沢・新井・十王前・道下・森ノ前遺跡がある。さらに根羽川を下って神・日向・大曽礼・日影平遺跡，小栃川に沿って小栃遺跡がある。

根羽村における本格的な分布調査・発掘調査は実施されていなく，開墾・耕作・道路改修工事等によって発見された遺跡である。このため，これら遺跡について，その一端を知るのみであり，小戸名・松原には地形的にみてさらにいくつかの遺跡の存在が予想される。

日影平・神・十王前には弥生時代後期土器片の出土が報ぜられているが他は縄文時代であり，注目される遺跡に日影平・十王前・森沢・小戸名・信玄塚・山吹遺跡等がある。十王前よりは縄文早期押型文・前期土器片の出土をみている。下伊那地方の各地に多くみられる縄文中期は少なく，これに反し，下伊那各地では少ない縄文後期の遺跡の多いことが根羽村で注目され，縄文中期後半の完形土器が小戸名遺跡で出土をみたのが特異な例である。

根羽村においては，古墳時代の遺跡は現在のところ皆無であり，平安時代の遺物も日影平に僅かにみられたにすぎない。

中世の根羽村及び月瀬村は，天文10年（1541）関氏領，天文13年関氏滅亡により下条氏領になったが中世前期はどのようであったのだろうか。

小川に開基された宗源寺については「人皇百一代，後小松天皇ノ御宇，応永２年３月俚侶ノ民協力シテ本宗ノ総本山総持寺ノ弟子大徹和尚ヲ招待シテ字寺無（毛）一字ヲ創建シ，号ヲ普門山宗源寺ト称ス……」と伝えられている。応永２年（1395）は南北朝争乱の時代である。宗源寺は駿遠三の三か国の惣禄所，

遠州可睡斉の触下にあり，信濃一国の曹洞宗は松代（長野市）長国寺の触下であった。

荘園時代の根羽・月瀬村は三河に属し，皇室御領八条女院領中の一荘，足助を中心とした高橋新荘に含まれていた。以後この荘は大覚寺統（南朝）の荘園となった。足助庄の名が現われるのは，応永29年である。

土豪足助氏は，皇室と深い関係にあり，土着以来応仁中（1467～）まで続いた勤王一族であった。遠州の天野氏・奥山氏，駿河の狩野氏・土岐氏・入江氏。三河の足助氏・永江氏・栗倉氏・山田氏，信州の香坂氏・歌舞氏等は宗良親王を奉じた南朝方であった。根羽城ケ峯は興国5年（1344）以降大河原に滞在した宗良親王と足助氏，その他の南朝ルートの一つとして重要な拠点であった。

当時，月瀬村には月瀬城と杣路砦があり，南朝方の通路であった。月瀬城は一心寺の境内がそれである。南は根羽川，西は小沢にはさまれた三角の台地端（標高580メートル，比高20メートル）を堀切って城地としたものである。

本郭跡に曹洞宗普門山一心寺が開基されたのは，大永8年（1528）で，地士原十郎左衛門によるとされている。

『信陽城主得替記』に「弘治年中（1555～）ヨリ月瀬ニハ武田氏ノ属将下条伊豆守ノ旗下ニテ，月瀬氏郎少輔勝家知行十八貫文ヲ領シテ月瀬ニ居リ，命ニヨッテ杣路峠ニ設クル狼烟台ノ守衛ヲ司ドル」とある。

月瀬村の戸数は，永禄頃（1558～）「庄屋・百姓十人アリ」の文書が残されているが，当時は九人百姓だったと語り継がれている。

武田信玄は天正23年（1554）伊那に侵入し，弘治4年（1558）に全信濃を支配下におき，西上の準備を整えた。元亀2年（1571）三河へ侵入，3年（1572）に美濃岩村田城を攻略している。この間三州街道を改修し，美濃への道を開き，軍用路とした。

天正元年（1573）信玄は野田城攻略の陣中病を得て軍をかえす途中亡くなっているが，その地が根羽説と阿智村駒場説があり，不明である。根羽横旗には信玄塚があり，宝篋印塔が建てられている。

信玄死後，勝頼も遠江・三河・美濃に進出したが天正3年（1575）長篠の戦に敗北，続いて美濃・遠江を失ない，天正10年（1582）に織田の伊那侵入により，武田氏は滅亡した。武田支配時代には根羽は三河・美濃・遠州への交通の要路として軍時上の要地の一つであった。

現国道153号は伊那街道・三州街道とも呼ばれ，戦国時代から伝馬制度が行なわれており，江戸時代には五街道の一つ中仙道に対する脇往還とし，商品流通路一中馬の道として栄え，根羽は中馬の宿場として重要な位置にあった。

Ⅱ　発掘調査経過

昭和56年度夏，農業構造改良事業が根羽村月瀬日影平に実施されることになった。

日影平は，縄文中期，後期堀之内式・加曽B式，晩期土器，石鏃・打石斧・磨石・敲打器・磨石斧・石匙・石錐・石錘・石冠・石剣・石棒等の石器・石製品の出土で注目されている遺跡である。しかし，農業構造改善事業は遺跡についての考慮はされず実施されることとなった。この計画を知った浅井合人氏は教育委員会に発掘調査の必要を知らせ，村負担において発掘調査を行うことになったのが本次調査である。

予算の制約があり，このため埋立となる範囲と，山よりの湿地帯とみる水田はそのままおき，削り採り範囲に重点をおいて調査したものである。

調査区域を水田ごとにⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに分け発掘調査を行なった。

発掘調査日誌

5月24日（くもり・午後より雨）

遺跡の状態をみにいく。ピットを掘り土層の状態をみる。60cmの深さに遺構の存在を認める。縄文後・晩期とみる土器片あり，表面採集に山茶碗・天目茶碗片等多くみられる。

5月26日（晴）

調査器材・器具を整え，準備をなす。

5月27日（晴・後くもり）

器材運搬，テント設営。

Ⅰ調査区にグリッド（2m×2m）を設定。

5月28日（雨）

5月29日（くもり，強風）

Ⅰ区グリッドA・C・E・Gの1・3・5列の調査，水田床土下に集石あり，中世陶片多し。DⅠグリッドに縄文後期壺形土器の出土をみる。

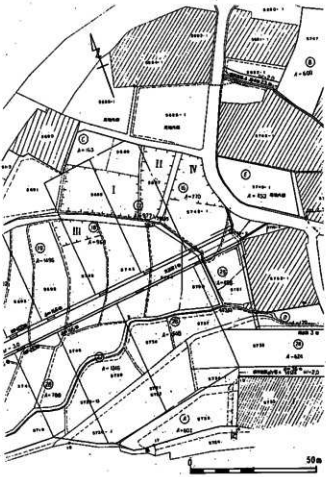


図3　日影平遺跡発掘調査区域

5月30日（晴）

Ⅰ区1～5・6列全面排土作業，集石群検出。中世陶片多し。

5月31日（はれ・くもり）日曜日休み

6月1日（雨）　作業休み

建物整理

6月2日（晴）

Ⅰ区　5～7列排土作業，集石3か所に検出。中世陶片・縄文後期土器片多し。集石群東側より測量。

Ⅱ・Ⅳ区ブルトーザで表土を排除。

6月3日（晴）

Ⅰ区7～10列排土作業，集石群測量，ブルトーザ午前Ⅲ区の表土排除。

6月4日（くもり）

Ⅰ区上層集石調査を終わる。測量。

Ⅲ区の調査にかかる。1号・2号・3号（Ⅲ集石群）住居址検出。上層に中世陶片，下層に縄文後期遺物多し。

6月5日（晴）

1号住居址完掘，東側に土坑1号があり，小骨片の出土をみる。

2号住居址調査，縄文後期土器片多し。3号住居址とみる配石遺構，北側は水路の下となり，プラン不明。上層山茶碗多く，下層は縄文後期土器片の出土をみる。

4号・5号住居址を検出する。縄文後期土器片多し。

Ⅰ区集石土壙（土35号）調査・測量，縄文後期土器片，多くの石器の出土をみる。

6月6日（晴）

2号住居址調査。

Ⅱ区排土作業，住居址とみる黒土の落ちこみ3か所と集石群あり。縄文後・晩期土器片，中世陶片多し。

6月7日（晴）・8日（晴）　作業休み。

建物整理。

6月9日（晴）

2号住居址完掘。1号・2号住居址測量。

Ⅱ区排土作業。

6月10日（くもり）

5号住居址完掘，3号住居址（Ⅲ集石群）性格不明に終わる。5号・3号住居址測量。

Ⅱ区排土作業終わる。集石土坑とみる数か所あり，遺物多し。

Ⅳ区排土作業にかかる。縄文後期土器片多く，住居址とみる落ちこみがみられる。

6月11日（くもり）　朝，雨の心配，作業中止する。

土器整理。

6月12日（くもり・雨）作業中止

遺物整理，復原。

6月13日（くもり・時々雨）

Ⅰ区の調査にかかる。住居址のNo.を20代とする。21号住居址検出，調査，さきの大形壺の出土は灰を含むピットより。南壁に逆位に小形深鉢の出土をみる。南東側に中世土坑4号あり。

22号住居址検出。縄文後期の遺物多し。

6月14日（雨）　休み

6月15日（くもり・時々雨・のち晴）

21号住居址完掘，写真撮影。22号住居址調査，大形住居址となり，南西端は水路にかかり調査不能。土坑5号が掘りこまれている。集石坑31号調査。23号住居址検出。

6月16日（晴・暑くなる）

22号住居址完掘，写真撮影・測量。21号住居址測量。24号住居址検出，調査。縄文晩期土器を含むが中世住居址。山茶碗片多し。

4号住居址の調査。上層に山茶碗片多く，下層は縄文後期となる。石錘3この出土をみる。

6月17日（晴・暑い）

24号住居址完掘，ヘッツイを置いた焼土のマウンドあり，山茶碗・中津川古窯の大甕片の出土をみる。23号住居址調査，縄文後期。

4号住居址完掘・測量。

根羽中学校生徒全員午前中作業，Ⅳ区の表土排除作業，　土器片・鹿角出土をみ，縄文後期土器片多し。Ⅱ区南側の調査。

6月18日（午前30分間雷雨あり・晴）

23号住居址完掘・測量。遺構分布測量（Ⅲ区・Ⅰ区東側）。25号住居址とみるを検出調査。

Ⅳ区の調査。31号・32号・33号住居址とみる落ちこみを検出。Ⅳ区住居址No.を30代とする。

6月19日（晴）

Ⅰ区25号住居址とみるは消え，土坑7号・8号となる。

Ⅳ区　31号・32号住居址検出調査，33号・34号・35号住居址検出。縄文後期土器片多く，32号址は前期末となる。

6月20日（くもり・午後雨となる）

31号・32号住居址完掘，測量。31号址南西コーナーより外に掘りこむ柱穴または炉址あり，周囲は焼土，内部は灰・炭が充満，内部より天目茶碗半個体出土。土坑16・17号が内部に掘りこまれている。32号址は縄文前期。

33号住居址床面まで掘り下げる，縄文後期。35号住居址プランを検出，調査にかかる。縄文後期遺物多し。

6月21日（晴・夕方より雨）　休み

6月22日（くもり・雨）

朝小雨，遺構の排水作業。34号・36号住居址プランをさぐる。午前で作業中止。

6月23日（雨）　作業中止

遺物整理

6月24日（晴）

35号住居址ほぼ掘上げる。南にⅣ集石群あり。34号・36号住居址プラン検出，調査を進める。37号・38号住居址検出。37号址に中世遺構あり，中世陶片多し。

6月25日（くもり・時々雨）

33号・35号・36号住居址完掘，写真撮影・測量。34号・38号住居址調査にかかる。土坑25号・23号検出掘り上げ。

6月26日（くもり・時々雨）

34号住居址完掘・測量。北側に土坑21号・22号あり。38号住居址は前夜の雨で水びたし，調査不能。
Ⅱ区の遺構検出にかかる。

6月27日（雨）　作業中止
遺物整理。

6月28日（雨）　〃　休み

6月29日（くもり・時々晴）

34号・36号住居址写真撮影。38号住居址とみるを検出不明。建物址Ⅱを調査，柱穴に焼木をもつがあり中世陶片多し。

6月30日（くもり・小雨時々あり）

38号住居址とみるを調査。建物址Ⅱの東側を調査・測量，西側の建物址を確かめる。天目茶碗・皿等あり。

7月1日（くもり・小雨あり）

建物址Ⅱを完掘・写真・測量。11号・12号住居址を検出。11号址に条痕文土器の出土をみる。土坑9号21号・22号・23号を調査。掘り上げる。
Ⅰ区西側の調査をはじめる。方形となる落ちこみ検出。

7月2日（雨）　作業不能。
建物整理

7月3日（雨）　作業不能
建物整理

7月4日（雨）　作業不能

7月5日（くもり・小雨あり）

25号住居址検出調査。中世陶片多く，縄文後期土器を下層にみるが量少ない。

11号住居址調査，床面に掘りこむが土坑3基あり，中世建物址Ⅱ西側にかかる。縄文晩期土器片床面にあり，晩期の住居址となる。

7月6日（くもり・晴・暑い）

25号住居址完掘，中世の建物址Ⅰとなる。南側に並ぶ集石列あり。写真撮影・測量。

11号住居址完掘，写真撮影・測量。37号住居址の調査，円形プランとなり，縄文前期末の土器片・石鏃の出土多し。12号住居址の調査にかかる。

7月7日（くもり・小雨あり）

Ⅰ南集石列の調査。縄文後期土器片多し。

12号住居址完掘・写真撮影・測量，縄文後期住居址とみる。38号・37号住居址調査。

7月8日（晴・暑い）

Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区の遺構分布測量，写真撮影。37号・38号住居址完掘，写真撮影。

7月9日（晴・くもり・一時小雨）

Ⅰ・Ⅱ集石土坑調査，測量，断面調査，写真撮影・測量。37号・38号住居址測量。Ⅳ区遺構分布測量。調査予定区域の調査を終わる。テント・器材を撤収する。

7月11日

遺物・測量図整理。

発掘調査終了後，引き続き喬木中学校・座光寺小学校建設用地調査，下久堅地区畑畠水工事立合調査が等に昭和57年3月までの調査が続いた。その後，前年度の発掘調査報告書の作成があり，ようやく9月4日より，遺物の作図・製図，原稿執筆にとりかかったものである。

Ⅲ　発掘調査結果

日影平遺跡において本次発掘調査した遺構は次のようである。（図4）

1. 住居址　19――縄文前期末2，縄文後期13，縄文晩期3，中世1
2. 中世建物址　3
3. 集石群　4
5. 土　坑　38

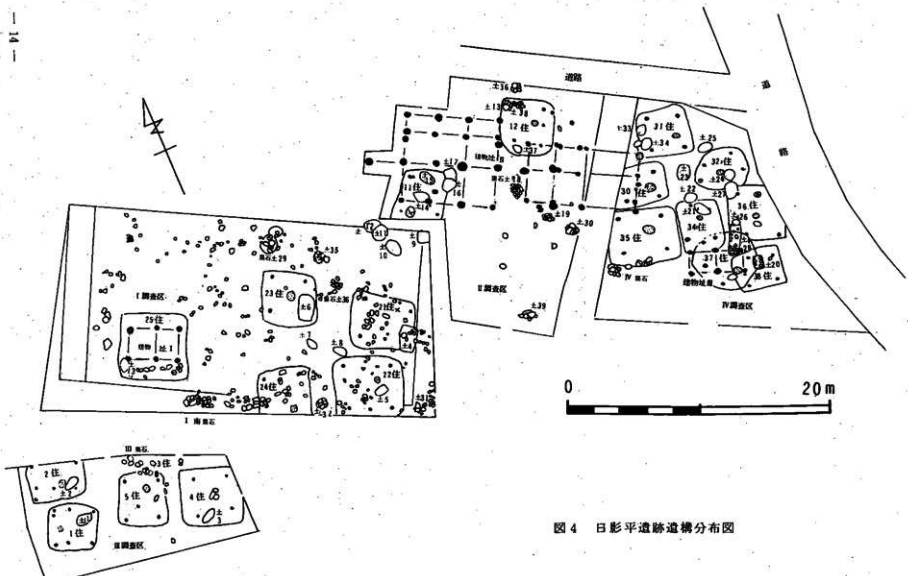


図 4　日影平遺跡遺構分布図

住居址番号はⅠ区を20代，Ⅱ区を10代，Ⅲ区を1代，Ⅳ区を30代を付した。

（Ⅰ）縄文時代

1. 住居址

（1）縄文前期

32号住居址（図5）

Ⅳ調査区の北東端に発見され，南は土坑27号，と36号住居址によって一部を切られている。南北3.4 m東西3.9 mの北と東壁は弧をえがき円形状を，西と南壁は隅丸方形状をなす変形の黄砂土に5～10cmと浅く掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く柱穴は壁に沿って6個が配せられている。炉址は中心よりやや南に寄ってあり，円形の浅く掘り凹めた地床炉である。その東側の一部を切って土坑24号が掘りこまれており，住居址の施設か，独立した後に掘りこまれた土坑かは把握できなかった。

遺物（図28のⅠ・図61の46）

土器は縄文前期最終末期を主体とする。1の大歳山式の出土は注目される。細隆帯文に縄文施文の3・8・9・23の北白川下層Ⅳ式に比定される1群，口唇に連続押引文・胴上部に斜行条線，下部に横位の縄文施文の2，ヘラ状刺突文と斜行条線の4，口縁内面に縄文帯をもつ3・6，諸磯C式とみる20・21等がある。覆土出土の18・22・24・25は中期初頭とみるものがある。

石器には図28のⅠの28の磨石，29の凹石，図61の46の石鏃がある。水田造成時に覆土の大半は削りとられ住居址西側から多くの遺物の出土をみている。

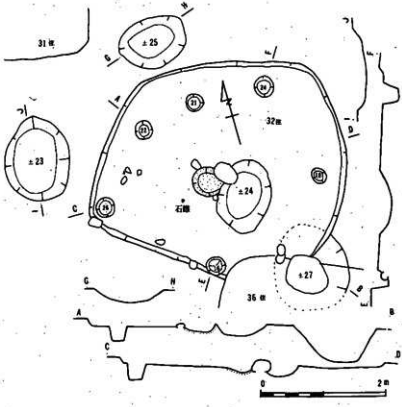


図5　日影平遺跡32号住居址，土坑23号・24号・25号・27号

37号住居址（図6）

Ⅳ調査区西側に発見され，東は38号住居址，北は34号・36号住居址に切られている。東西径4.8 mの円形をなし，黄砂土に20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴は建物址Ⅲの柱穴が4こあり本住居址とみるは3こ発見されており，その配置からみて主柱穴6ことみたい。炉址は中心より南東に片寄ってあり，石囲炉である。

遺物（図28のⅡ・図61の38～45）　土器には1の大歳山式があり，細隆帯連続刻目をもつ1群，隆帯文

上に縄文施文の1群，ヘラ刺突文に半截竹管の斜行沈線を施す1群等，北白川下層Ⅳ式に比定されるものと諸磯C式に比定されるものがみられる。

石器には図28のⅡの24の大形の玄武岩製の石鉞ともみる打石器があり，図61の39～45の石鏃と38の刃部を欠くため用途不明の石器がある。39は黒曜石，41は風化する珪質凝灰岩以外は玻璃質安山岩製である。

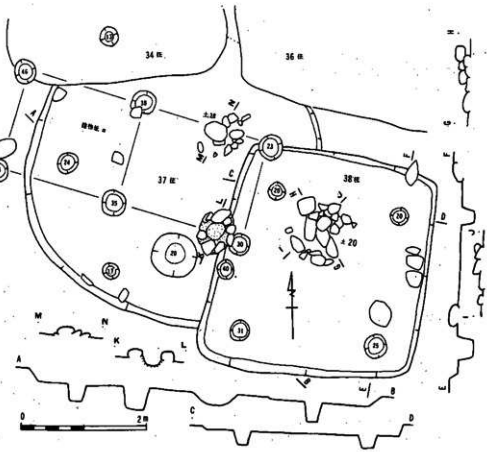


図6　日影平遺跡37号・38号住居址，土坑20号・28号，建物址Ⅲ

（2）縄文後期・晩期

1号住居址（図7）

Ⅲ調査区の南西端に発見され，2号住居址が北70cmに隣接している。南北3.65m×東西4.1mの隅丸方形をなし，黄砂土に10cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴は7こ発見されており，配置からみて主柱穴は4こと思われるが，あるいは6こともみられる。炉址は砂土のため赤く焼けた焼土はみられないが，灰と炭を充満する地床炉であり，西側柱穴間の中央よりやや内側に入ってある。北東から中心部近くにわたって土坑1号が掘りこまれている。

遺物（図29・図61の1）　土器は後期後葉であり，口縁に突起をもつ1・5，口縁端を肥厚させる3・4があり，文様には縄文・条線・沈線によるものと，無文土器がある。

石器（図29の18～24・図61の1）には打石斧・磨石斧・横刃形石器・石錘・磨石・石鏃があり，特に石鏃は大形の特殊な形態をもつものである。

2号住居址（図7）

1号住居址の北65cmにあり，北は用水路となり調査不能となった。東西4.5mの隅丸方形をなし，西壁で15cm，東壁で20cm黄砂土に掘りこむ竪穴住居址である。覆土は暗黒色砂土で埋まり，床面は堅く，主柱

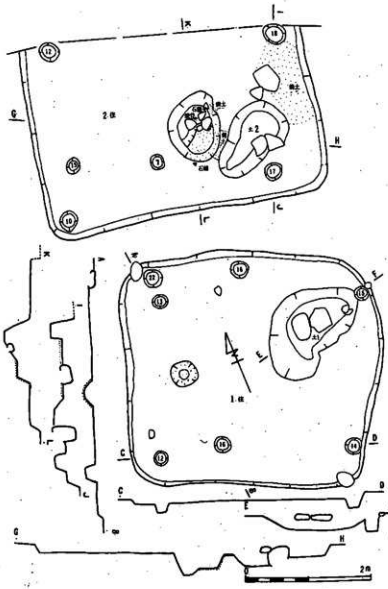


図7　日影平遺跡1号・2号・住居址・土坑1号・2号

穴は配置からして6ことみられる。炉址は中心より南東に片寄ってあり，内面に粘土を張り，このため焼土は著しくその北西に接して灰溜があり内部は灰・炭が充満し，小動物とみられる焼骨が混っていた。また東壁に沿う広い範囲に粘土の張り床があり焼土がみられた。炉址の東側には土坑2号が掘りこまれていた。

遺物（図31・図61の2・3）土器は炉址と灰溜よりの出土が多く，掘之内式に比定される関西系の地元の土器群である。文様は縄文と沈線によって構成されるが大半を占め，1の縁の条線を施すもの，3の研磨された無文を斜行沈線で切る，隆帯の上を押圧文をめぐらす70・71，瓜形文を交互に施す36，筵状具による大きな刺突文を施す37等があり底部にはアジロ痕がみられる。

石器は石鏃2，打石斧1，石鍬2と少ない。

3号住居址—Ⅲ配石群（図8）

5号住居址の北に接し，最初3号住居址としたが，配石群とみるものである。北は用水路となり，調査不能であった。5.5 m × 5.5 mの三角形状の範囲に人頭大の石をおそらく5組の集石をもって配置されている。

この3号住居址とみた配石群の用水路を隔てた北東のⅠ調査区南端にⅠ配石群が，中世の24号住居址にかかってあり，そこよりは大洞ＢＣとみる土器の出土をみているが，その関連性はみられない。

遺物（図32・図61の23～25）　出土量は少くないが，土器は無文土器が大半を占め，図32の4は口縁部が縁帯状に肥厚し，この部分に縦の沈線を施す，後期前半に位置づくとみられる土器である。石器には13の玄武岩製の大形打石斧と図61の23の石匙，24・25の石鏃がある。

4号住居址（図9）

Ⅲ調査区の東端に発見され北東側の一部は調査不能であった。南北4.6 m×東西4.75 mの隅丸方形をなし，黄砂土に15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴は4本整った配置にある。炉址はほぼ中央部にあって，浅く掘りこむ地床炉で，北と西には石が置かれている。このすぐ南に灰溜とみる掘りこみがつく。南西に土坑3号が掘りこまれている。

遺物（図30）　土器は縄文後期前半の岡山県の堀之内式に比定される中津式である。深鉢が大半であるが8は小形壺の口縁部であり13は甕形ともみられる。施文は縄文と太い沈線の重円文がみられ，無文土器は多い。

石器は少なく，31の刃部を欠く打石斧，32の花崗岩製の石鏃がある。

5号住居址（図10）

Ⅲ調査区の中央部に発見され，北側にはⅢ配石群が隣接している。南北4.2 m×東西3.8 mの隅丸長方形をなし，黄砂土に15～20cm掘りこむ竪穴住居址である。

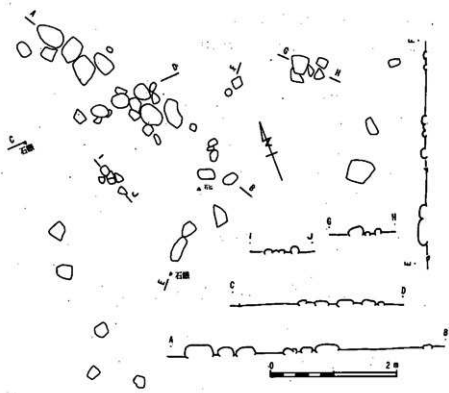


図8　日影平遺跡Ⅲ配石群（3号住居址）

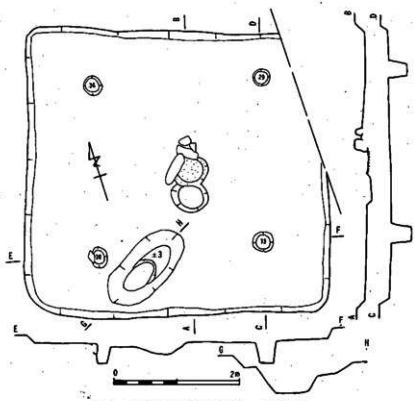


図9　日影平遺跡4号住居址，土坑6号

床面は堅く，主柱穴は4こ，炉址は中心より北に片寄ってあり，北側に僅かに粘土を張り，焼土がみられ，内部には灰と炭を多量に含む地床炉である。その東に接して浅い掘りこみがあり，灰溜とみるものである。

遺物（図33・図61の4）　土器片の出土は比較的多く，後期の古い時期の土器であり，文様は縄文・沈線・連続圧痕文等により構成されている。

石器には打石斧・横刃形石器・磨石・石錘と図61の4のチアート製のスクレパー状の石器がある。

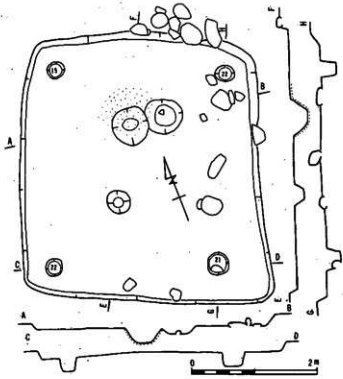


図10　日影平遺跡5号住居址

21号住居址（図11）

I調査区東側の中央部に発見され，南北4.1 m×東西5.05の隅丸不整長方形をなし，黄褐色砂土に10～15cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は黒色砂土で下層に僅か暗褐色砂土がみられた。床面は堅く，東南隅に中世の土坑4号が掘りこまれており，柱穴5こがみられるが，主柱穴は6ことみる。炉址は中心より僅か北に寄ってあり，砂土のため赤い焼土はみられないが，灰と炭の充満している地床炉である。中央から西によって南北方向に一抱大の石が並んでいる。炉址を35cm東に隔てて掘り凹みがあり，この中に堀之内式壺1個体が立って出土をみた。水田造成の際床土を堅めるため口縁部を僅か残して削りとられている。おそらく，竪穴は20cm以上の深さをもっていたものと思われる。また南壁近くに小形深鉢1個体が伏った状態で出土をみている。

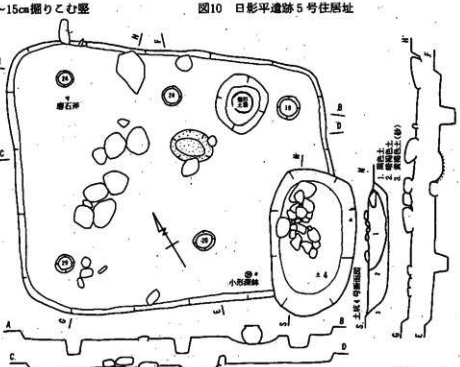


図11　日影平遺跡21号住居址，土坑4号

遺物（図34・35，図55の1，図61の5～8）　遺物の出土量は多い。土器は堀之内式を主体とする。図

34の広口壺はほぼ完形に近いもので，高さ27cm，口径26.7cm，最大径は胴中央部にあり，径35.5cmである。頸部はしまって口縁部は短かく，強くくの字状に外反する。胴部は扁平な球状をなす。文様は口縁部は無文，頸部直下より，隆帯に刻目と沈線で構成される異った3組の懸垂文，沈線による3組の異った同心円文よりなる懸垂文をもち，それぞれの区画内部を磨消縄文で飾るもので，これらの文様間は無文となり，極めて特異な文様構成をもつ土器である。図35の1の完形の小形深鉢は全高12cm，口径12.7cm，口辺に1この突起をもち口縁部は大きく外反し，3この八の字状の隆帯を，胴中央部に1条の隆帯をめぐらしその下に箆状具による6こ1組となる懸垂文をめぐらしている。これらの他の土器文様は磨消文と沈線を主にし，押圧文・押引刺突文をめぐらすもみられ，無文土器・横帯文土器があり，底部はアジロ底である。堀之内Ⅱ式を主体とする土器群とみる。

石器の出土も多く，磨石斧3・打石斧6・横刃形石器4・石錘1・石鏃（図61の5～8）4と図55の1の大形凹石の出土をみている。

22号住居址（図12）

21号住居址の南0.7mにあり，南の一部は井水のため調査不能であった。東西5.4mの隅丸方形をなし，黄褐色砂土に15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。覆土は黒色砂土で埋まり，床面は堅く，柱穴7こが発見されているが，配置からみて主柱穴は6ことみる。炉址は中心よりやや北東に寄ってあり，地床炉である。炉址の南に土坑5号が掘りこまれている。

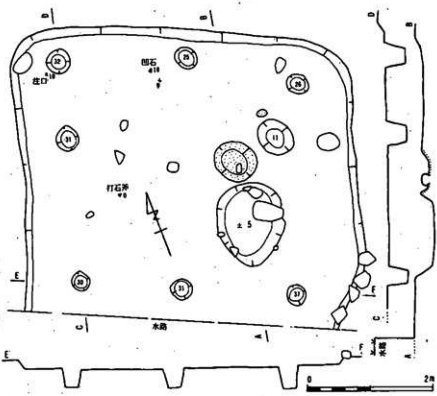


図12　日影平遺跡22号住居址，土坑5号

遺物（図36・37，図61の10・11）　出土量は多く，土器は縄文後期後半の西北出式・加曽利B式を主体とするが，堀之内式の混入もみられる。覆土上層出土には後期終末期の寺津下層式もあり，新旧入りまじっての出土をみている。深鉢が大半を占めるが，浅鉢（図37の1），注口土器（図37の26・27）の注口部がある。

石器には打石斧6，磨石1，凹石1と石鏃（図61の10・11）2の出土をみている。

23号住居址（図13）

Ⅰ調査区のほぼ中央部に発見され，21号住居址の西2.6mにある。南北4.5m×東西4.2mの隅丸方形をなし，黄褐色砂土に20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。覆土は暗黒色砂土で下層は暗褐色砂土となる。

床面は堅く，主柱穴は4ととみられる。炉址はほぼ中心部にあり，楕円形の地床炉で赤い焼土はみられないが，灰と炭の充満するものである。炉址の東から南にかけて土坑6号が掘りこまれている。

遺物（図38・図61の12・13）　土器の出土は少なく堀之内式Ⅰ式に比定される中津式に類例をみる西日本的の土器である。注口土器の注口部3この出土をみている。

石器には打石斧4・横刃形石器2・磨石1・石錘1図61の12の石鏃・13の石錐があり，図38の28は石棒の頭部とみるものである。

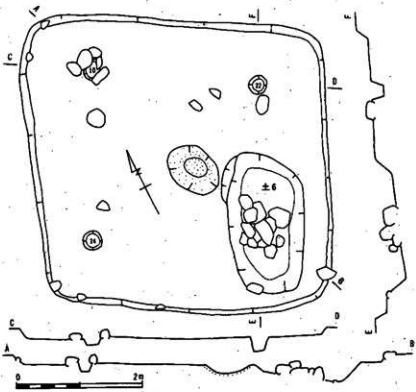


図13　日影平遺跡23号住居址，土坑6号

31号住居址（図14）

Ⅳ調査区の北端に発見され，南0.5 mに33号住居址がある。南北3.65 m×東西3.9 mの隅丸方形をなし，黄褐色砂土に10～15cm掘りこむ竪穴住居地である。覆土は暗黒色砂土で埋まる。床面は堅く，主柱穴は4こ，炉址は中心より南東に片寄ってあり，地床炉である。西側の壁に沿って土坑33号・34号が掘りこまれ，南西隅に中世の炉址ともみられる深い掘りこみがあり，内部より天目茶碗の半個体と鹿角の出土をみている。

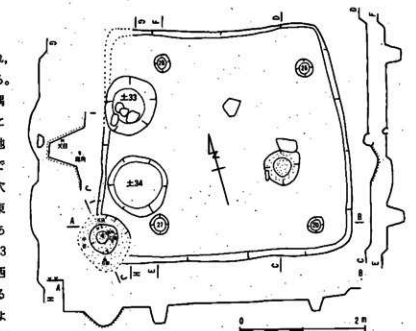


図14　日影平遺跡31号住居址

遺物（図40・図61の34～37）　土器の出土は多く，後期後半西北出式を主体とし，愛知県の薬地貝塚・三重県馬場遺跡等にみられる土器群で元住吉山式に比定される。

石器には床面出土の石錘1と，図61の34の石錐・35・36の石鏃・37のスクレーパー状の石器があり，覆

土上層より磨石斧1・打石斧1・横刃形石器1と石鏃1の出土をみている。

33号住居址（図15）

北に31号，南に35号住居址に隣接し，西は農道のため一部は調査不能となった。南北3.2 *m* の隅丸方形をなし，黄褐色砂土に約10cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴は3こ発見されているが，その配置からみて主柱穴は4とみる。炉址は中心より南東に寄っており，径70～80cmの不整円をなす浅い掘りこみの地床炉である。中央部に中世建物址Ⅱの柱穴があり柱の炭化木を残していた。

遺物（図41・図61の47）　土器は後期終末を主体とし，21・22の把手部のブタ鼻状の瘤がみられ，20の注口部つけ根周縁を刻みをもつ隆帯で飾る注口土器がある。図41の3の口縁部を巻貝の圧痕による擬縄文を太い沈線で切る深鉢もみられる。石器の出土は少なく，磨石斧1・打石斧2・石鏃1である。

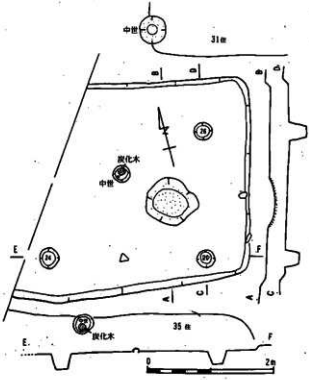


図15　日影平遺跡33号住居址

34号住居址（図16）

西に35号・東に36号住居址があり，前期末の37号住居址の北の一部にのっている。南北4 *m* ×東西3～3.8 *m* の隅丸長方形をなし，黄褐色砂土に20～25cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は黒色砂土で埋まり，床面は堅く，主柱穴は配置からみて4ことみられる。炉址は中心より北に片寄っており，地床炉で，西に浅い掘りこみが付いている。北側には土坑21号が掘りこまれ，さらに北壁を切って土坑22号がある。南壁に沿って集石がある。

遺物は比較的少なく，土器（図42）は前期末の37号住居址の混入もあり，13は前期，図示以外にも諸磯式の小片もみられており，上層出土には3の堀之内式の関西系もあって多様である。1の注口土器は明るい赤褐色を呈し，弧をなす沈線内を磨消縄文で飾る。2は押引をもつ隆帯と突帯をもち，23の小形浅鉢は黒褐色を呈し研磨されている。これらは後期終末とみられるがはっきりしない。5は築地式の後期後半であり

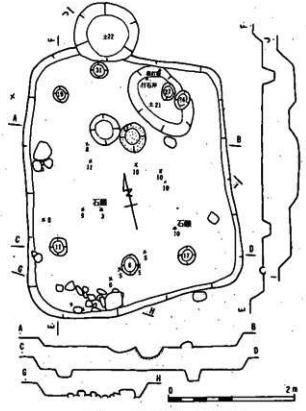


図16　日影平遺跡34号住居址

25・26は晩期大洞B式である。石器（図61の48～50）は石鏃3この出土をみたにすぎない。

35号住居址（図17）

北に33号，東に34号住居址と隣接しており，南に集石群Ⅳがある。南北4.2m×東西4.3～5.15mの不整形な隅丸方形をなし，黄褐色砂土に20～25cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は黒色砂土で埋まり，床面は堅く主柱穴は4こ，炉址は中心より僅か北東に寄ってあり，楕円形の深い掘りこみをなす地床炉である。北壁について中世建物址の柱穴があり，焼木を残す。南側には住居址内に一部はいって集石群Ⅳがある。

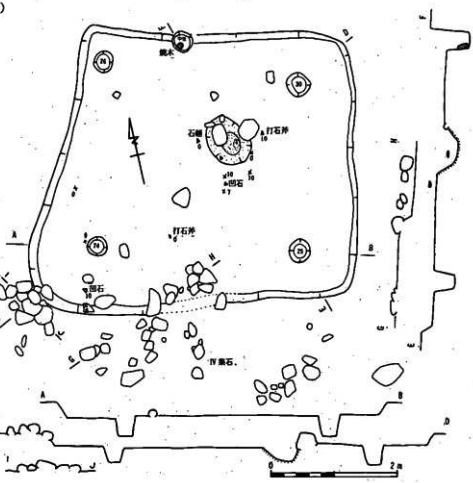


図17　日影平遺跡35号住居址，Ⅳ集石群

遺物（図43・44，図61の51・52）の出土量は多く，土器は縄文後期終末期の深鉢を主体とし，浅鉢・壷，注口土器がある。図43の1は広口壷とみられ，灰褐色をなし，部分的には黒褐色を呈し，研磨された精製土器である。口縁部を欠くが，頸部直下に4この小さな突起をもち，その間を沈線で区画し，その下に上下2条の横走文をはさんで柳状具による条線を八の字状に施文し，胴中央部に2条の横走文で飾る類似の少ない土器である。深鉢には浅い条痕と条線をもつもの，小巻貝を用いた太い凹線文を有するもの，矢羽根状文を有すものがあり，無文土器も多くみられる。宮滝式・寺津下層式に比定されるものと思われる。

石器の出土量も多く，図43の20は砂岩製の扁平半月形磨製石器と呼ばれる東海地方に類例をみるもので当地方では初見である。図44の25～39の磨石斧1・打石斧6・横刃形石器4・凹石2・石皿1・敲打器1，図61の51・52の石鏃等がある。

36号住居址（図18）

西0.5mに34号住居址があり，北は32号住居址の，南は37号住居址の上にのり，東の一部は道路のため調査不能であった。南北4.35m×東西4.4mの隅丸方形をなし，黄褐色砂土に20cm前後掘りこむ竪穴住居

址である。覆土は黒色砂土で埋まり，床面は堅く，主柱穴は配置からみて４ことみる。炉址は中心より南に片寄ってあり，円形の地床炉である。北西隅に土坑27号が掘りこまれ，南西に集石があり，その北に土坑26号がある。

遺物（図45）　土器は縄文後期末の深鉢を主体とし鉢・注口土器がある。大きな波状口縁をなす21，突起する把手の20があり，隆帯に擬縄文を施す30，口縁部に凹線を横走させ巻貝の側面圧痕を加えるもの等がみられる。また覆土上層出土には晩期初頭の32がある。図45の34・35は中期初頭の北屋敷式土器で混入のものである。

石器には46の大形の打石斧があり，打石斧５，横刃形石器４の出土をみている。52は靴形に似た特異な石器である。

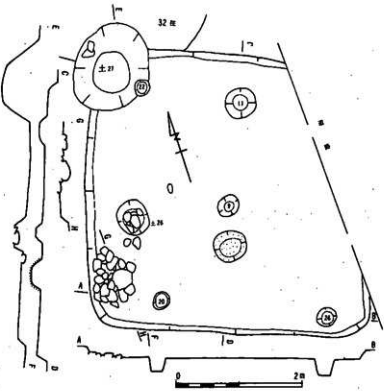


図18　日影平遺跡36号住居址，土坑26号・27号

38号住居址（図６）

Ⅳ調査区の南端に発見され，37号住居址（縄文前期末）の東側４分の１を切っている。南北3.5 m×東西3.35mの隅丸方形をなし，黄褐色砂土に20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。覆土は黒色砂土で埋まり床面は堅く，主柱穴４こが整った配置にある。炉址はおそらく巣石土坑20号のため崩されたとみられ，発見できなかった。

遺物（図46・47）は多く，土器は床面・覆土下層出土（図46）は縄文後期終末期である。１は寺津下層式の深鉢で口縁部は小巻貝による凹線文をめぐらし胴部は浅い条痕を施すものである。12は浅い条痕のみであり，条痕をもつ土器は多くみられ，これらが主体をなす。10・11は小巻貝施文の後期終末の土器である。羽状沈線をも５・23，把手にはブタ鼻状の瘤をもつ２，突起をもつ３等があり，後期終末の土器群である。

石器（図47の39～50）には打石斧８・磨石斧１・横刃形石器２・磨石１があり，石製品に51の石棒がある。自然石の砂岩を利用し，沈線を施こし，精巧に作られている。図46の35は土製品とみられるが欠けがあって何であるか不明である。東側テラスより図53の56～58の後期末の土器片の出土をみている。

12号住居址（図19）

Ⅱ調査区の北側に発見され，南北4.5 m×東西3.5～4.25mの不整形な隅丸方形をなし，黄褐色砂土に10～15cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は黒色砂土で埋まり床面は堅く，北西隅に集石土坑13号・38号が，南壁に沿って土坑37号が掘りこまれている。主柱穴は4こ，炉址は中心よりやや北東に寄っており，楕円形の地床炉である。

遺物（図48・図61の19）は少なく，土器には加曽利B式とみるものもあるが，床面出土には条痕文土器があり，覆土出土にも条痕文土器数点あり晩期の住居址とみたい。18・23は小巻貝の先端の刺突文と側面圧痕をもつ寺津式であり無文土器も多い。15の条線をもつ土器は不明である。石器には打石斧2，図61の19は小形の砥石とみられ針状具の製作に用いられたとも推測されるものである。土製品に土製円板の出土をみている。

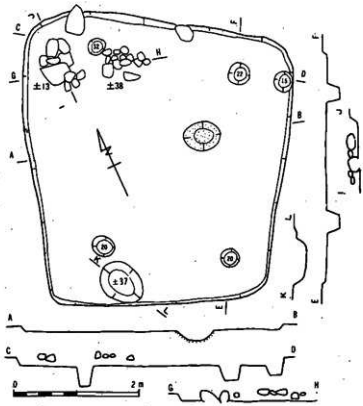


図19　日影平遺跡12号住居址，土坑13号・38号・37号

11号住居址（図20）

Ⅱ調査区西端に発見され，南北推定3.7 m×東西3.7 mの隅丸方形をなし，黄砂土に西側で15cm，東側で25cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は大半は黒色砂土で埋まり，下層の僅かが暗褐色土となる。南側の一部は水田境となり，石垣の裏詰石で破壊されていた。床面は堅く，主柱穴は配置からみて4ことみられ，住居址内に土坑14号・15号・16号が掘りこまれ，中世建物址Ⅱ号の柱穴3こも掘られており，炉址は，中央より僅か南東に寄った中世の柱穴の北に残る焼土がその跡とみられる。

遺物（図50・図61の9）　土器

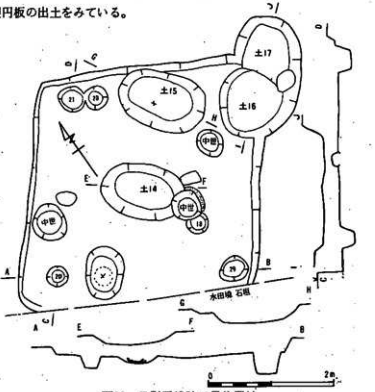


図20　日影平遺跡11号住居址

は縄文晩期五貫森式の壺と深鉢の出土をみている。1・2は南西壁に近い浅い掘りこみより出土した。1の壺は無文，内面は木鏟状具による整形痕を残し，灰黄色を呈し，底部はアジロ底である。2の大形深鉢は口径35.5㎝，胴下部を欠く。荒い単斜条痕を施す。素地は黄褐色であるが炭化物の付着は多く，暗褐色を呈す部分が多い。内面は黄褐色で細い斜条線がみられる。3は口縁に押引圧痕の凸帯をめぐらし，その下に横位の条痕を施すもので，五貫森式にみる甕形土器ともみられる。13は篦描きの沈線で絵画風にもみられるが不明である。覆土出土には後期土器片の混入がみられる。

石器には打石器3・横刃形石器5・凹石1・石鏃1の出土をみている。

2. 集　石　群

Ⅰ調査区上層―水田の床土を排除した全面に図21にみるように，いくつかのパートをもつ集石群があり，中には土坑となるものもみられ，さらに下層には一抱大の石をもつ集石群が検出されている。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ調査区に発掘調査した集石群番号は調査区番号に従いⅠ南集石群というようにした。また一つのパートをもち土坑とみるものは集石土坑と仮称することにした。

Ⅰ南集石群（図22）

東端は24号住居址の床面に一部ははいり，東西6.7㎜の間に最大は径65㎝，20～50㎝大の平石が3乃至5のパートをもって東西方向に並ぶ集石群である。

遺物（図49・図61の20～22・図55の3）土器は縄文晩期前半を主とし，後期後半の混入もみられる。図49の1は大洞B―C式の精製土器の浅鉢，羊歯状文が施され朱彩されている。8は口縁部は無文頸部に隆帯をめぐらし，その下に条痕を施し，7は浅い条痕をもち，5の小巻貝の側面圧痕等にみる晩期前半の土器である。

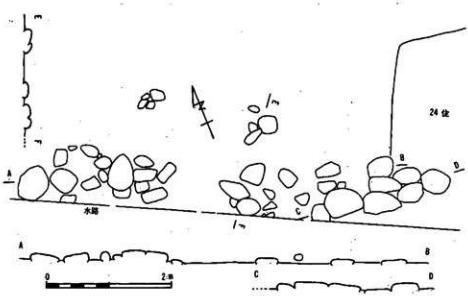


図22　日影平遺跡Ⅰ南集石群

石器には打石斧2・敲打器1・石錘3・凹石1・磨石3，図61の20はポイント状石器，21・22の石鏃2の出土をみている。

Ⅰ西集石群（図4・図21）

Ⅰ調査区の西端にあり南北6㎜の間に人頭大から一抱え大の石が転在し，3組のパートよりなるとみるが集石群といえるかはっきりしない。

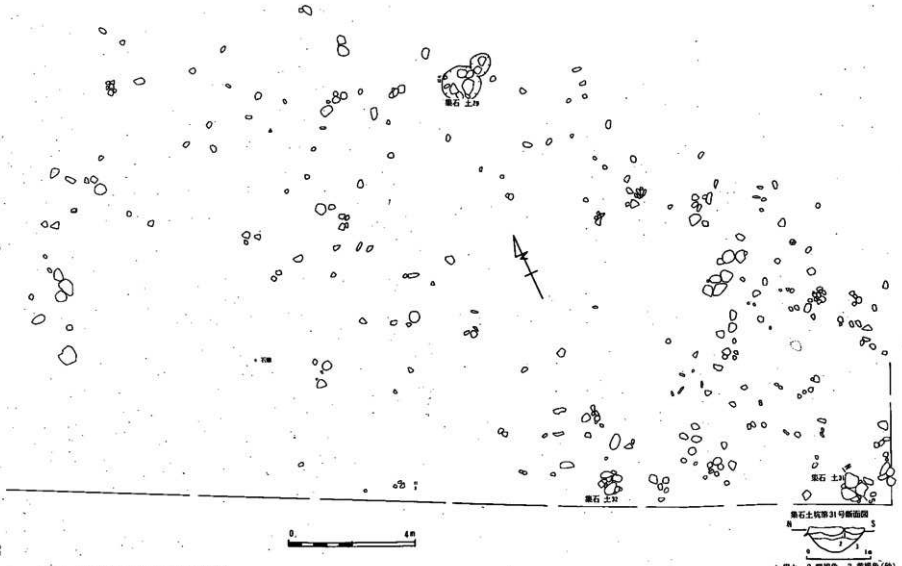


図21 日影平Ⅰ調査区上層集石群

遺物（図51の26～29）は少なく，浅い条痕をもつ後期末の土器と後期中葉の磨消縄文をもつ縁帯文土器があり，石器に敲打器１この出土をみたにすぎない。

Ⅲ 集 石 群（図８）

３号住居址として最初に把えたもので，３号住居址で記載している。

Ⅳ 集 石 群（図17）

35号住居址の南に接し，一部は南壁の上にのり東西6.6 mの間に人頭大から一抱大の石を４乃至５のパートをなしＮ 65°Ｗ方向に並ぶ集石群である。

遺物（図52の53～57）は少なく，縄文晩期終末の水神平Ⅰ式の口縁に押圧凸帯をめぐらす条痕文土器の出土をみており，後期末の35号住居址構築後の集石群である。

25号住居址内集石群（図26）

中世の25号住居址内南壁に沿う集石であり，床面に密着して，一抱大の平石を並べている。25号址は南北5.2 m×東西5.4 mの隅丸方形の竪穴住居址で，６この柱穴が整った配置にあり，中世前半の東濃系Ⅳ期の山茶碗の多くの出土をみた住居址で建物址Ⅰ号としたものである。おそらく縄文後期遺構の上に建てられた建物址とみたい。そのため集石群はそのままに置かれたと予想される。

遺物（図39・図55の３）　土器は上層出土の条痕文土器をみるが，主体をなすは堀之内Ⅰ式に比定される関西系の中津式である。石器には図55の３の石皿がある。

3. 土　　坑

土坑の発見は多く，これらの中には掘りこみのみのものと，上部に集石をもつもの一集石土坑がある。集石土坑中には集石のみで掘りこみはなく，土坑といえないものもあったが一応　集石土坑の範疇にいれた。土坑番号は発見順に付し，縄文期と中世を区別し次の一覧表に示すことにした。出土遺物皆無については土坑の形態，周辺の状況からその時期を決めた。

図23　日影平遺跡土坑29号

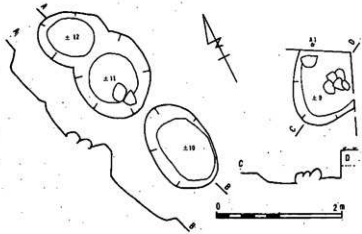


図24　日影平遺跡土坑９号・10号・11号・12号

日影平遺跡土坑一覧表（縄文時代）

表 1

土坑No.	調査区	図No.	大きさ cm 南北・東西	深さ (cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	遺物図No.
1	Ⅲ	7	100×175	25	不整楕円形	N 70° E	なし	1住内に掘りこむ 上部に2この平石をおく	後期？	
2	〃	〃	80×132	30	〃	N 60° E	〃	2住内に掘りこむ 東壁に2この石をおく	〃	
3	〃	9	70×151	45	長楕円形	N 63° E	〃	4住内に掘りこむ 南側を深く掘りこむ	〃	
5	Ⅰ	12	130×105	30	楕円形	N 17° E	〃	22住に掘りこむ 上部に大石1こをおく	〃	
9	〃	24	×110	25	〃？	N 62° E	後期後半土器片・打石斧1	北東は石垣調査不能 底部に石6こをおく	後期後半	53の20～22
10	〃	〃	148×95	35	楕円形	N 14° W	なし		後期？	
11	〃	〃	115×117	35	円形	N 18° W	条痕文土器片・石製円板	土坑12号と接す 南壁に石2こをおく	晩期	53の23～27 61の56
12	〃	〃	90×90	30	〃	N 22° W	なし	土坑11号に接す	〃？	
13	Ⅱ	19	85×55		楕円形	N 4° E	磨石斧1・磨石1	12住内にあり 集石，掘りこみなし	〃？	53の28・29
14	〃	20	88×135	20	〃	N 46° W	なし	11住内掘りこみ	〃？	
15	〃	〃	90×140	23	〃	N 35° W	条痕文土器 上層中世スリ鉢片	〃	晩期	53の30～33
16	〃	〃	110×120	20	〃	N 58° E	精製土器片・無文土器片	〃 土坑17の上にのる	晩期？	53の34・35
17	〃	〃	？×105	30	〃	N 42° E	中津式土器片・打石斧1	〃 土坑16の下に	後期前半	53の36～43
18	〃	27	100×100	35	方形	N 6° E	口縁外面に半截竹管の押引施文・条痕文，条痕文・羽状沈線文土器，磨石斧1・石棒1	集石土坑	晩期一 （大洞C平行）	52の29～35 55の2
19	〃	〃	80×70	5	〃	N 24° W	中津式土器片 打石斧1	〃	後期前半	52の36～43
20	Ⅳ	6	110×100		〃	N 55° E	なし	〃 38住の中にある	後期終末	
21	〃	16	125×80	20	楕円形	N 30° W	敲打器1,打石斧1	34住の中に掘りこまれる	後期	
22	〃	〃	93×98	30	円形	N 10° E	条痕文土器・精製土器片	34住の北壁をきる	晩期	53の44～46

土坑No.	調査区	図No.	大きさ(cm) 南北・東西	深さ(cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	遺物図No.
23	Ⅳ	5	123×103	25	楕円形	N 10°E	凹石1		後期？	53の47
24	〃	〃	115×80	20	〃	N 32°E	なし	32住の中に掘りこむ	〃？	
25	〃	〃	80×116	20	〃	N 76°E	なし		〃？	
26	〃	18	55×48	18	〃	N 4°W	なし	36住の中に掘りこむ底に石を数個おく	後・晩期	
27	〃	〃	140×118	55	〃	N 40°E	なし	36住・32住の壁をきる	〃	
28	〃	6	65×60		〃	N 55°E	なし	37住内の集石	〃	
29	Ⅰ	21	195×120	25	2この円形	N 76°E	後期西北出式?土器片 磨石斧1,大平鉢(上層)	集石土坑	後期後半	51の18～21 60の2
30	Ⅱ	4	径100		円形		なし	集石のみ	後・晩期	
31	Ⅰ	21	100×100	40	方形	N 6°W	寺津下層式一条線をもつ凹線文土器片(52・53), 磨石1・凹石1, 前期末土器片(50・51), 上層より山茶碗一大平鉢底部	集石土坑	後期末	53の50～55 60の2
32	Ⅰ	〃	74×60		楕円形	N 10°E	元住吉山Ⅱ式平行の土器片 巻貝形土器(30) 底部アジロ底	集石のみ	後期後半	51の30～38
33	Ⅳ	14	90×78	20	〃	N 30°E	諸磯C土器片	31住に掘られている上部に石4こをおく	前期末	53の1～8
34	〃	〃	95×94	15	円形	N 12°W	〃	〃	〃	53の9～19
35	Ⅰ	23	245×120	40	長楕円形	N 10°E	後期後半土器・条痕文土器片 大形打石斧1, 打石斧2, 磨石斧1, 横刃形石器2, 敲打器1, 磨石2, 上層中世スリ鉢片1	上部に小穴, 内部中央に大石がつまる	晩期？	51の1～17 55の4～6
36	Ⅱ	27	50×44		三角形	N 16°W	後期後半土器片 打石斧1	集石のみ	後期後半	51の39～43
37	〃	19	75×60	22	楕円形	N 25°W	なし	〃 12住の中にある	後・晩期？	
38	〃	〃	55×78		三角形	N 70°W	称賀里式浅鉢(44) 大洞B式土器片	12住の中に掘りこまれる	晩期前半	52の44～52
39	〃	4	80×150		楕円形	N 70°W	なし	集石のみ	後・晩期？	

4. 遺構外の縄文時代遺物

Ⅱ調査区中央部集石土坑群上層出土（図52の1～23）の土器には，研磨された無文土器が多くみられ，五貫森式とみる条痕文器があり，晩期の遺構につながるものともみられる。2・13は精製の浅鉢であり，14は壺とみられ，5は口端中央に深い沈線を，外面に押圧による刻目を施し，その下に3条の沈線をめぐらし，斜行の半截竹管沈線を施す浅鉢で晩期ともみられるが不明である。

石器には磨石斧の折れと打石斧3があり，Ⅱ調査区遺構外より石鏃（図61の26～28・30～33）7こと，小形打石斧（図61の29）1この出土をみている。

Ⅳ調査区を主とした遺構外遺物（図54・61の53～55・59～62）　縄文早期末から晩期にわたる土器片出土をみている。図61の59は早期末人海式・60は中期初頭・61は中期中葉の勝坂式・62は中期末の結節縄文をもつ土器で図54の5も同じである。図54の1～4は前期末，6は中期後半とみられるがはっきりしない。後期後半の土器が大半を占め，晩期の条痕文土器，櫛描文もみられる。石器には図61の53～55の石鏃3こ，磨石1こがある。

Ⅰ調査区では図61の14～18の石鏃5こがあり，用地外の道路東側の畑より図61の57・58の石鏃が表採されている。

5. 日影平遺跡出土縄文時代石器一覧表（表2）

注＝花…花崗岩，黒…黒曜石，玄…玄武岩
玻…玻璃質安山岩

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
32住	28の1	28	磨石	花	6.7	2.8	125	
〃	〃	29	凹石	〃	10.2	7.8	510	
〃	61	46	石鏃	チアート	2.0	1.2		
37住	28の2	24	打石器	玄	5.6	6.3	67	
〃	61	38	不明	玻璃質安山岩	1.9	1.5		刃部欠
	〃	39	石鏃	黒	1.4	0.7		
	〃	40	〃	玻	1.5	0.8		
	〃	41	〃	珪質凝灰岩	2.0	1.0		
	〃	42	〃	玻	2.2	0.8		
	〃	43	〃	〃	1.4	0.9		
	〃	44	〃	〃	2.1	1.3		
	〃	45	〃	〃	1.5	1.0		
1住	29	16	定角磨石斧	角閃石岩	10.2	5.2	220	
		17	打石斧	玄	13.4	5.7	102	
		18	〃	〃	7.0	3.7	86	基部欠

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
1住	29	19	打石斧	玄	8.4	3.7	70	
		20	〃	〃	7.4	4.0	46	
		21	磨石	花	6.3	6.8	230	
		22	横刃形石器	玄	3.3	6.2	15	
		23	〃	〃	6.7	8.5	140	
		24	石錘	珪質岩	7.0	4.5	140	
1住	61	1	石鏃	玻	3.2	1.7		異形
4住	30	31	打石器	玄	9.0	5.5	135	刃部欠け
〃	〃	32	石錘	花	6.6	5.0	118	
2住	31	67	〃	片麻岩	9.0	4.2	100	
		68	〃	凝灰岩	8.1	3.8	90	
		69	打石斧	玄	6.4	4.2	60	基部欠く
	61	2	石鏃	チアート	2.1	1.2		
	〃	3	〃	黒	1.4	1.2		
3住	32	13	打石斧	玄	11.0	7.8	385	

道構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
5住	33	38	打石斧	玄	10.7	4.1	129	
		39	〃	〃	7.4	5.2	48	
		40	横刃形石器	〃	4.1	8.8	57	
		41	〃	〃	5.7	6.0	82	
		42	磨石	安山岩	5.7	4.5	98	
		43	〃	花	3.7	3.6	55	
		44	石錘	凝灰岩	6.6	3.6	50	
	61	4	スクレーパー?	チアート	3.0	5.2	11	
21住	35	43	定角磨石斧	ヒスイ様岩	10.8	4.2	148	
		44	磨石斧	角閃石岩	14.3	5.0	295	
		45	〃	〃	12.2	4.6	210	欠部欠け・
		46	打石斧	玄	17.7	6.5	275	
		47	〃	〃	12.8	5.6	238	
		48	〃	〃	10.4	5.0	235	
		49	〃	〃	9.3	4.9	158	欠部欠け
		50	〃	〃	8.2	3.4	66	基部欠け
		51	〃	〃	10.3	3.8	50	
		52	横刃形石器	〃	6.0	7.5	114	
		53	〃	〃	5.3	11.0	86	
		54	〃	〃	5.5	8.7	78	
		55	〃	〃	4.4	9.0	50	
		56	石錘		4.7	3.6	40	半欠け
	61	5	石鏃	黒	2.0	0.7		
		6	〃	玻	2.5	0.8		有舌、舌部先端を欠く
		7	〃	〃	1.5	0.8		
		8	〃	火山性砂岩	1.5	0.8		
	55	1	石皿	花	17.2	19.5		
22住	37	28	打石斧	玄	10.1	6.1	127	
		29	〃	〃	9.2	3.6	63	
		30	〃	〃	9.5	3.7	76	
		31	〃	〃	9.4	4.5	80	
		32	〃	〃	12.6	5.1	114	
		33	〃	〃	8.9	4.8	66	

道構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
22住	37	34	磨石	花	9.4	7.6	700	
		35	凹石	安山岩	6.5	9.0	320	
	61	10	石鏃	玻	2.0	1.0		有舌?
		11	〃	黒曜岩	1.8	1.2		〃
23住	38	21	横刃形石器	玄	4.4	6.0	26	
		22	〃	〃	12.0	12.0	415	
		23	石錘	〃	4.6	3.6	40	
		24	打石斧	〃	10.2	4.8	100	
		25	〃	〃	11.5	4.5	140	
		26	〃	〃	7.4	4.4	70	基部欠け
		27	〃	〃	8.0	5.0	120	刃部欠け
		28	石棒?	花	6.0	7.0		
		29	磨石	〃	7.5	7.0	252	
	61	12	石鏃	玻	2.2	1.8		
		13	石錐	黒	2.3	0.7		
31住	40	13	石錘	安山岩	6.4	5.0	98	
		53	磨石斧	チアート	6.0	5.6	143	基部欠け
		54	横刃形石器	玄	5.5	7.0	40	
		55	石錘	チアート	4.2	3.7	16	
		56	打石斧	玄	8.8	4.7	66	
	61	34	石錐	珪質凝灰岩	3.3	0.5		
		35	石鏃	玻	2.2	0.7		
		36	〃	黒	1.8	0.8		
		37	ポイント	珪質凝灰岩	4.0	2.0		基部欠け
33住	41	29	打石斧	玄	9.6	3.7	100	
		30	〃	〃	6.5	4.5	88	刃部欠け
		31	磨石斧	角閃石岩	13.0	5.4	435	
	61	47	石鏃	黒	1.7	1.1		
35住	43	24	扇平半月形磨石斧	珪質凝灰岩	9.8	3.0		
	61	51	石鏃	玻	2.2	0.8		
	〃	52	〃	黒	2.2	0.7		
	44	25	磨石斧	角閃石岩	9.0	4.1	220	基部欠
		26	打石斧	玄	9.3	4.6	154	

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
35住	44	27	打石斧	玄	6.7	4.7	164	
		28	〃	〃	13.0	7.0	260	基部欠け
		29	〃	凝灰岩	6.4	4.6	37	
		30	〃	〃	8.2	2.6	34	
		31	〃	玄	8.0	6.0	82	
		32	礫器	〃	11.2	9.4	820	
		33	敲打器	砂岩	8.6	4.3	165	
		34	凹石	花	9.2	6.5	900	
		35	〃	変輝緑岩	6.5	12.0	850	
		36	〃	花	11.3	15.4	1860	
		37	横刃形石器	玄	6.3	10.8	125	
		38	〃	〃	4.0	8.2	36	
		39	〃	〃	3.7	9.5	45	
36住	45	46	打石斧	〃	16.6	6.8	688	
		47	〃	〃	11.6	3.7	154	
		48	〃	〃	9.7	3.6	95	
		49	〃	〃	9.8	4.0	80	
		50	〃	〃	8.0	5.8	60	
		51	横刃形石器	〃	4.0	5.1	16	
		52	〃	〃	8.0	9.6	98	変形軟形
		53	〃	〃	4.3	9.0	28	
		54	〃	〃	4.2	8.3	40	
38住	47	39	打石斧	〃	13.2	4.7	180	
		40	〃	〃	11.4	6.2	94	
		41	〃	〃	9.2	4.0	70	
		42	〃	〃	9.2	4.1	80	
		43	〃	〃	9.8	4.2	126	
		44	〃	〃	6.0	4.5	90	刃部欠け
		45	〃	〃	6.8	4.5	90	基部欠け 使用痕
		46	磨石斧	〃	6.5	4.6	140	刃部欠け
		47	横刃形	〃	7.4	6.2	55	
		48	〃	〃	7.7	6.7	80	
		49	〃	〃	5.6	4.5	40	

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
38住	47	50	磨石	花	5.7	5.0	175	
		51	石棒	砂岩	12.0	4.0	270	
12住	48	38	打石斧	玄	9.8	4.5	78	
		39	〃	〃	10.1	4.0	56	
	61	19	砥石	石英片岩	5.0	1.5		
南石集群	49	12	打石斧	玄	9.0	3.5	72	
		13	〃	〃	10.8	4.7	97	
		14	敲打器	安山岩	11.3	4.0	370	
		15	凹石	玄	7.0	9.4	700	
		16	石錘	硬砂岩	8.4	4.5	140	
		17	〃	〃	6.5	4.5	115	
		18	〃	〃	8.0	4.0	83	
		19	磨石	花	7.8	8.3	290	
	49	20	〃	花	6.0	4.5	150	
		21	〃	安山岩	4.6	3.2	46	
	61	20	ポイント	玻	3.7	2.1		
		21	石鏃	黒	2.3	2.4		有舌
		22	〃	チアート	2.0	1.2		〃
	55	3	石皿	花	17.0	13.0	2240	
11住	50	26	打石斧	玄	9.3	4.0	77	
		27	〃	〃	9.0	3.7	61	
		28	〃	〃	9.0	5.2	120	刃部欠け
		29	横刃形石器	〃	7.7	6.8	60	
		30	〃	〃	6.7	6.8	65	
		31	〃	〃	3.6	6.6	32	
		32	〃	〃	4.0	7.6	40	
		33	〃	〃	4.0	7.6	40	
		34	凹石	硬砂岩	10.6	7.7	615	
	61	9	石鏃	チアート	1.7	0.8		
土35	51	12	横刃形石器	玄	8.5	9.2	225	
		13	打石斧	〃	16.5	5.5	480	
		14	〃	〃	14.5	4.7	210	
		15	敲打器	変輝緑岩	15.3	4.2	330	

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
土35	51	16	敲打器?	凝灰岩	11.6	3.8	265	
		17	横刃形石器	玄	4.0	6.7	30	
	55	4	打石斧	〃	23.8	10.5	1600	
		5	磨 石	花	11.0	12.0	1000	
		6	〃	花(風化)	11.5	11.5		
土29	51	21	磨石斧	角閃石岩	13.2	5.0	370	
Ⅰ西第6群	〃	29	敲打岩	砂 岩	11.7	6.6	800	
土36	〃	43	打石斧	玄	11.0	3.7	85	
Ⅱ第2群土層	52	25	磨石斧	角閃石岩	5.5	3.8	82	刃部欠
		26	打石斧	玄	8.0	4.4	65	
		27	〃	〃	8.4	5.0	110	
		28	〃	〃	8.8	6.0	120	
土9	53	22	〃	〃	10.9	4.6	136	
土13	〃	28	定角磨石斧	チアート	8.0	4.6	?	
〃		29	磨 石	砂 岩	10.0	12.2	865	
土17	53	43	打石斧	玄	7.5	4.0	68	
土23	〃	47	凹 石	花	8.4	13.5	740	
土31	〃	54	磨 石	〃	5.0	5.7	210	
	〃	55	凹 石	安山岩	7.0	8.0	240	
土18	55	2	石 棒	〃	15.5	10.0		
土11	61	56	円 板	砂 岩	4.0	3.8		

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
遺構外								
Ⅰ区	61	14	石 鏃	玻	2.1	1.0		
		15	〃	チアート	2.4	0.8		
		16	〃	〃	1.7	0.9		
		17	〃	玻	2.5	1.2		
		18	〃	〃	1.8	0.8		
Ⅱ区	61	26	〃	〃	1.8	1.2		
		27	〃	〃	1.6	1.7		頭部欠く
		28	〃	黒	1.8	0.9		横欠く
		29	打石斧	三紀泥岩	6.0	3.6	21.0	
		30	石 鏃	玻	2.5	1.0		有舌
		31	〃	〃	1.7	1.0		頭部欠く
		32	〃	〃	1.6	1.2		
		33	〃	〃	2.7	1.8		
Ⅲ区	61	53	石 錐	〃	2.4	0.6		
		54	〃	〃	2.5	0.8		刃部欠け
		55	石 鏃	〃	1.6	1.2		
	54	29	磨 石	安山岩	6.0	6.3	110	
用地外	61	57	石 鏃	石 鏃	2.2	1.2		
		58	〃	〃	1.7	1.0		

（Ⅱ）中　　世

1. 住居址・建物址

24号住居址（図25）

Ⅰ調査区南側中央部にあって，南の一部は用水路のため調査不能。東西4.1 mの隅丸方形をなし，西壁で15cm，東壁・北壁で10cm前後黄褐色に掘りこむ竪穴住居址とみるが，縄文晩期のⅠ南集石群の東端が中央部まできており，集石は床面に密着しており，本址はこれらの石をそのままにした上に建てられたものとみられる。遺物出土状況は，住居址の北から東側の外部にわたっており，浅い竪穴をもった住居址であり，その周辺にわたった建物址の一部ともみられる。柱穴は3個発見されているが，南東の床面は漆黒となり，不明であったが主柱穴は4ことみられる。南壁に沿う位置にヘッツイを置いたとみる長方形の粘土で堅めた焼土のマウンドがある。

遺物（図56・図61の63）　住居址内には1～23があり，青磁・山茶碗・皿・大平鉢・四耳壺・大甕・片口鉢がある。山茶碗は薄手のきめは細かく，「八」の字に胴部から口縁部に達する成形で，口径平均13～15cm，高台径平均5.2～6.1 cm，ミコミ部中央に圧痕を残し，高台とミコミにモミガラ圧痕がつく。中津川古窯では窯伺一1，白土原一1の中間に位置づくとされる。大平鉢13は「八」の字形の成型でロクロひき上げ時の凸凹を大きく残し，小形丸皿18～20は糸切底である。15の四耳壺は無釉で白土原一1期とみられる。22の片口鉢は上層出土で灰釉がかかる。21は須恵質の壺の口縁部，14は素焼土器の甕，6・7は良質な青磁輪花碗で中国産である。12は中津川古窯産の大

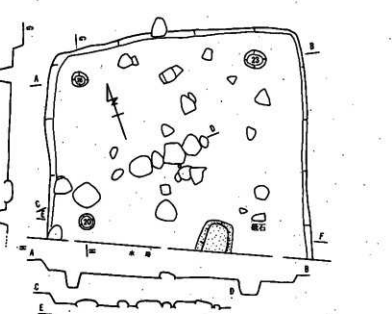


図25　日影平遺跡24号住居址

甕であり，胴部破片数点の出土をみており，鎌倉期末から室町初頭のものであり，山茶碗と期を同じくする。23は砂岩製の砥石である。図61の63の元豊通宝（宗神宗1078年）の出土をみている。

建物址1号（25号住居址）

Ⅰ調査区南西側に発見され，南北5.2 m×東西5.4 mの整った隅丸方形をなし，黄褐色砂土に20cm前後掘りこむ竪穴住居址であるが，床面に密着して南側に東西方向に並ぶ集石がある。ここよりは縄文後期前半の土器片（図35）の出土をみており，この期の遺構ともみられた。縄文後期遺構の上に建てられた1間×2間の掘立柱建物址とみるものである。3.6 m×4.5 mの範囲に6ことの住穴が整った配置にある。

遺物（図57の1～25）には山茶碗と古瀬戸がある。山茶碗1～7・11～17・22があり，碗には胴部で気もち張りながら「八」の字状に口縁部に達し，やや厚づくりのものと，薄手で胴部の張りの少なく「八」の字状に口縁に向かって開き，口縁部のやや外反するものがみられる。共に肌土はきめの細かく，後者は

もみがら痕を高台とミコミにもち，前者は高台のみにみられ，内面に自然釉のかかるものが多い。22は大平鉢の底部，7・17の皿は小形の糸切底で厚手成型である。洞窯一1号号期から白土原1号窯期とみられる。これらの他に中津川窯産の大甕の破片，青磁輪花碗の小片があり，鎌倉期末から室町初頭に位置づくものである。

古瀬戸には9の四耳壺，8・10の水注とみる口縁部，24の折縁深鉢，18の平碗は灰釉の緑または淡緑色を呈す。9の四耳壺は輪積成形で内面に指圧痕が多くみられ，緑色の釉の剥落が多くみられる。19の平碗の黒色，22の片口鉢は鉄釉の茶色を呈す。25は平安期の須恵器甕の混入である。

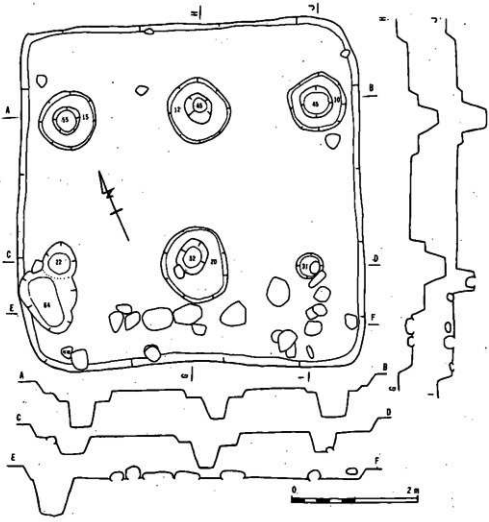


図26　日影平遺跡建物址1号（25号住居址）

Ⅲ集石群（3号住居址）上層出土（図57の26～34）

山茶碗と古瀬戸の出土をみており，山茶碗には26～28の碗と29の丸皿の出土をみ，建物址Ⅰと同時期である。古瀬戸には32の瓶子肩部は灰釉の緑色を呈す。34は四耳壺の底部とみるが無釉，33は壺の口縁部とみるが釉は剥落し，胎土は乳白色を呈す。30は鉄釉の黒と茶，31は灰釉の緑で共に口縁のみに釉がかかり器形・時期についてはっきりしない。

建物址Ⅱ号

Ⅱ調査区のほぼ中央部をⅣ調査区西端から続く東西方向に東側に2間×2間，西側はⅡ調査区西端は氾濫堆積と土盛のため調査を中止したため西端柱穴1こを検したのみであるが配置からみて3間×4間の建物二棟よりなる建物址である。東棟は柱穴中心で8.5 m × 4.7 mの範囲に柱穴間隔東西は西より2.1 m・

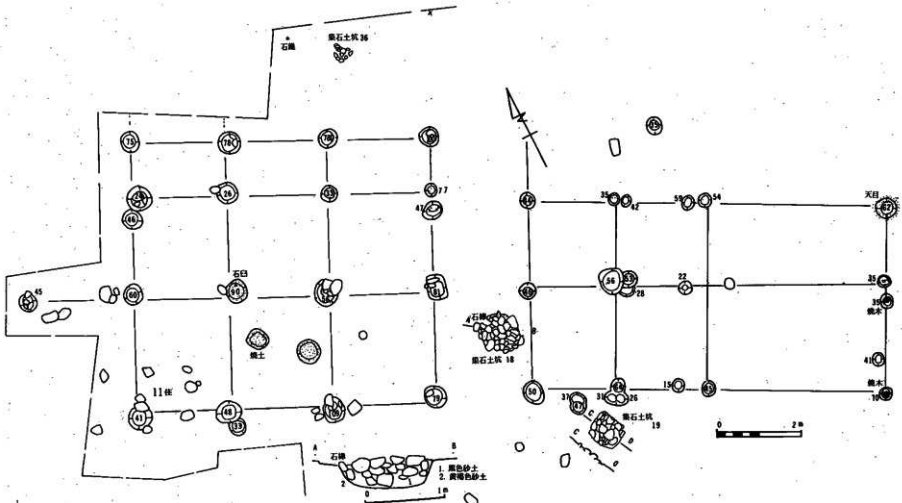


図27　日影平遺跡建物址Ⅱ号

2.1 m・4.25m，南北は南より 2.4 m・2.3 mと並ぶ。西棟は東西10.2 m×南北 7.1 mに南北，南より 2.7 m・2.4 m・1.8 m，東西は東より 2.6 m・2.4 m・2.2 m・2.4 mと並ぶ柱穴をもつ。東棟東端柱穴には柱の炭化木を残し，多くの柱穴には炭・灰を含み，被火災の建物址とみられた。南東隅の柱穴周辺より焼骨数点の出土をみている。

遺物（図58）には天目茶碗・平碗・皿・スリ鉢・鉢・山茶碗・石臼・砥石等がある。

天目茶碗　1は器高 7.15cm・口径 11.25 cm・底径 4.8 cm鉄釉の黒色，古い要素をもつ。2は器高 6.4 cm口径12cm・底径 4.7 cm鉄釉黒色。3は底部を欠き口径12.3 cm鉄釉黒色，4は二次的火にあい器表は荒れている，鉄釉黒色の平碗とみる。

5は香炉とみる鉄釉の黒色を呈す。8の合子は二次的な火にあい灰釉の淡緑色を残すが釉は剥落甚しい。

山茶碗には，碗の6は「八」の字状に胴部から口縁に開き薄手の肌土のきめ細かい白土原期とみる。同時期の14・16は碗底部で高台にモミガラ痕をもち，7は丸皿，糸切底である。

折縁深鉢20・21は灰釉，淡緑色を呈し，古瀬戸系とみられる。スリ鉢（17～18・23～25）は鉄泥釉，皿の8は鉄釉の鉢色，ミコミに印花を付す。10は灰釉の濃緑・11は鉄釉の黒・12は灰釉の黄白色・13は志野皿とみるもので本遺跡で1この出土である。以上碗鉢類・皿は15世紀から16世紀にかけての瀬戸・美濃窯産のものである。

石器には26～28の砥石は使用痕の著しいものであり，小形の鎌砥である。29は石臼の上臼で柱穴内の出土で，被火災により，10数こに破れ，4分の1余を欠く。砂岩製で側面に敲打痕をもち，挽き木をいれる穴が3こみられるが，4こあるとみる。また，臼の目がなく凹レンズ状をなしている特異な形状の臼である。30は同一個所出土の上臼片で目の荒い刻をもつ。

建物址Ⅲ号（図6）

Ⅳ調査区37号・38号住居址の上にのり，1間×2間の建物址であり，柱穴は中心で南北 1.75 m×東西 4 mの範囲にあり，東西柱穴間隔は東より 2.1 m・1.9 mである。しかし，38号・37号住居址の調査が先行し，その調査進行中にその存在を確認したものであり，西と東は漆黒の泥状の堆積層となり，十分な調査はできなかった。さらに北側よりの遺物の出土は多く，建物址はさらに拡がるとみるが十分に知ることはできなかった。

遺物（図59）広口瓶・天目茶碗・山茶碗・大平鉢・スリ鉢・素焼土器・大甕等の陶器類と鉄器・砥石の出土をみている。

1の広口瓶は無釉，ロクロ仕上げはよく，胎土はきめの細かい薄手であり，山茶碗Ⅳ期の白土原窯産と類似する。2の天目茶碗は古瀬戸の灰釉の緑色を呈す。山茶碗には6～8と9・10・12の底部があり，やや厚手で，8は内面に灰釉がかかり灰釉陶器ともみられる。底部はつけ高台の断面三角形をなし，櫛かにモミガラ痕をもつ。12は底部に薬痕を残す。3の大平鉢は口径29.8 cm，淡黄褐色を呈し，口縁端部に沈線1本を引く。11は瘤の頭部下に条線を引く　古瀬戸で灰釉の緑色を呈すが二次的な火にあい肌は荒れている。スリ鉢に13・14があり，ともに鉄釉で黄褐色を呈し，14は半截竹管による目を付すものである。4は素焼土器の甕，5は古瀬戸の灰釉の緑色を呈し，香炉と思われる。

鉄器には15・16があり，15は不明，16は鉄鏃の茎とみられる。砥石に17・18があり，鎌砥とみる。

図示以外に中津川窯産の大甕片・素焼土器片があり，鉄鉾1の出土をみている。建物址Ⅲ号の時期は鎌倉期末から室町初頭とみたい。

2. 土　坑

中世土坑は4基が調査され，次の一覧表に示すことにし，縄文時代土坑上層出土遺物は表の中に別にあつかった。

日影平遺跡土坑一覧表Ⅱ（中世）　　表3

土坑No.	調査区	図No.	大きさ(cm) 南北・東西	深さ(cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	遺物図No.
4	Ⅰ	11	230 × 137	35	楕円形	N36°E	山茶碗・中津川窯大甕片	上部に集石あり	前半	60の1
6	〃	13	116 × 120	30	〃	N25°E	山茶碗（4・5）一白土原期 大平鉢(3)　〃	底部に集石	〃	60の3～5
7	〃	4	100 × 60	15	〃	N22°W	なし		〃？	
8	〃	4	120 × 65	20	〃	N40°W	山茶碗（白土原期）		〃	60の8
	縄文時代土坑上層出土中世遺物									
15	Ⅱ	20					スリ鉢		？	60の6
29	Ⅰ	21					大平鉢胴部		前半	60の2
31	〃	〃					大平鉢底部		前半	

Ⅳ　ま　と　め

日影平遺跡の立地は北は根羽川に面し，南は700 m級の山裾の急な傾斜面がせまっており，半月状に形成された沖積段丘面にある。四囲は1000 m級の山にかこまれ，その間を根羽川が西流している。根羽川は，ヤマメ・鮎・ウグイ等の魚類は多く，下流のダム建設前の魚獲は知られた所である。山間地であるが標高545～550 mの比較的温暖な気候にめぐまれ，山野の幸も多く，漁猟・採集の好適な地である。農耕地としても恵まれ，現在に至る居住の地となっている。愛知・岐阜の県境に接し，古くからの両県との交渉の深い地域である。

現在の日影平の人家は北側の川に沿うやや小高くなる段丘縁部に並び，その囲りは畑となっている。ここよりは縄文時代から弥生後期の遺物が表採されており，遺跡の中心部をなしている。今次発掘調査は遺跡の南西端部であり，その南と西は低地帯の漆黒な泥と砂の堆積となっている。

縄文時代前期終末住居址2軒が調査区域の東端部に発見され，大歳山式土器（図28）を主体とする。縄文地文の上に低い凸帯をめぐらし，その上に竹管状具による瓜形文を施す薄手の土器である。口縁内側にも縄文を施し，口縁部の屈曲も複雑である。下伊那地方では初見のもので注目される。

前期終末期住居址の上層及び周辺出土には早期末の入海式・中期初頭の北屋敷式・中期中葉の勝坂式・中期末の結節縄文をもつ土器片の出土をみており，これら時期の遺構の存在も予想される。

今次調査における主体をなすは縄文後・晩期である。住居址は黄褐色砂土に掘りこむ浅い竪穴住居址であり，また集石群が多く発見されている。

後期前半の土器は堀之内式を主体とする21号住居址出土（図34・図35の１）の広口壷・小形深鉢は注目される。これに平行する関西系の中津式が大半を占め，２号・23号・25号住居址出土土器（図31・38・39）には関西系の地元土器も含まれている。縄文帯と無文帯を細い沈線で切り，横帯文と円形文の組合せがあり，口縁部の肥厚がみられる。中津式後半に位置づくものが多く，堀之内式平行のものである。

後期後半には22号住居址では加曽利Ｂ式に西北出式（図36・37）がはいりこみ，31号住居址出土には元住吉山式一西北出式（図40）があり，口縁部に凸起をもつこの期の特徴ある土器がみられ，遺跡と隣接する岐阜県東恵那郡に多くの出土例をみており，この地方との関連を知ることができる。土坑32号出土の巻貝形土器（図51の30）は注目され，元住吉山式平行の土器である。

後期終末期には33号・35号・36号・38号住居址等があり，寺津下層式を主体とし，図46の１にみる深鉢は口縁部に凹線文をめぐらし，胴部は浅い条痕文を施すもので，この系統の粗製土器が多い。浅い条痕のみの土器，羽状沈線をめぐらすもの，小巻貝施文等があり，無文土器も多くみられる。図41の20の注口土器の装飾・21・22の把手部の装飾もみられる。安行Ⅱ式に比定される土器群である。

後期全般を通じ無文土器は多く，篦状具により研磨された土器もみられる。注口土器の注口部の出土も多く，特に後半期に多くみられる。

縄文晩期初頭の大洞Ｂ式に比定される土器には34号住居址上層にみる図42の26・27があり，土坑38号には滋里式の浅鉢・大洞Ｂ式の土器片の出土をみている。ついで大洞Ｂ－Ｃ式の精製朱彩の浅鉢（図49の１）をⅠ南集石群より出土している。後半には11号住居址出土（図50の１～３）の五貫森式の壷・深鉢が注目される。一晩期終末期にはⅢ集石群出土（図52の53～57）に水神平Ⅰ式の土器片をみる。

日影平遺跡出土の土器は前期末・後・晩期を通じ東海地方・関西系が大半を占め西に隣接する岐阜県との交渉をもつが多くみられる。飯田盆地に多くみる中期後半では，僅か結節縄文をもつ終末期の土器片２点の出土をみたにすぎない。飯田地方では極めて少ない後・晩期各期にわたる土器の出土は，日影平のおかれた愛知・岐阜二県の県境に接する地域性，自然的環境を考慮すべきであろう。

石器については，石器一覧表（表２）にみるように出土量は比較的多く，前期末では32号住居址は開田の際に上部が削られ出土量は少ないが，37号住居址は石鏃が主体をなしている。後・晩期では器種は多く磨石斧・定角磨石斧・打石斧・横刃形石器・磨石・石皿・凹石・敲打器・石錐・石鏃等があり，ポイント２こと，用途不明の図43の20にみる扁平半月形磨石斧と呼ぶ東海地方にみる石器があるが，当地方初見である。

器種については飯田盆地にみるものと大差はないが，材質については地域差は大きい。打石斧・横刃形石器は２・３例を除いて玄武岩製であり，石鏃は玻璃質安山岩60%，黒曜石25%，チアート20%，火山性砂岩５%で玻璃質安山岩製が大半を占める。

日影平の四囲の山は三紀層の割目より噴出した玄武岩をもっている。これらが打石斧・横刃形石器の材質に選ばれたのは天竜川沿岸段丘上の遺跡では硬砂岩・凝灰岩を用いたのと同じであり，石鏃・石錐に用

いられた玻璃質安山岩は三河の鳳来山系の三河から根羽丸山に産し，火山性砂岩もあり，手近に得られる材料をもって石器を製作しているところに地域性がみられる。

弥生時代の遺構・遺物は予想に反してなく，おそらく，現在人家のある区域にあるものと予想された。古墳時代から平安時代に至っては，平安時代末の須恵器片数点の出土をみているにすぎない。

中世では24号住居址，建物址Ⅰ号・Ⅱ号・Ⅲ号が調査されている。遺物からみて大きくみると二時期にわかれる。山茶碗でみると建物址Ⅲ号出土（図59）ではミコミ部は厚く，高台の断面は三角形をなし，1の瓶子，8は内面に灰釉が多くかかり器形も灰釉陶器の様相を残すものもあり，鎌倉時代中葉に位置づくとみるものがある。

24号住居址（図56），建物址Ⅰ号（図57の1～25）の山茶碗は薄手のきめの細かい胎土をもち東濃Ⅳ期の白土原一1期である。中津川窯産の大甕があり，鎌倉末から室町初頭に位置づくものである。伴出するに南宋の青磁輪花輪と古瀬戸がある。

建物址Ⅱ号（図58）の出土遺物の主体をなすは15世紀から16世紀にかけての瀬戸・美濃窯産のものを主体とする。

荘園時代の根羽・月瀬村は三河に属し，足助を中心とした荘園に含まれていた。南北時代，南朝の信濃宮宗良親王を奉じた三河の足助氏をはじめとする諸族と大河原滞在の宗良親王を結ぶ南朝ルートの一つとして，三河・美濃への重要拠点として根羽は主要な位置にあった。この地に栄えた豪族の居住の地の一つに日影平があったとみられる。戦国動乱期にはいって地士原氏の本拠は一心寺創建からみても，地形的にみても日影平にあったと推測される。（歴史的環境参照）

日影平遺跡においての遺構・遺物については多くの問題をもつものであり，初見の土器は多く，石器の材質も不明のものが大半を占めていた。土器については神村透・紅村弘両先生に，石器の材質については松島信幸先生に御教示を受けたものであるが短時間のため十分な理解をもてず，研究不足もあって不明の点は多く，誤りも多いことと思われる。このため，報告書は資料提示に重点をおいたものであり，皆様方の御批判・御教示をおねがいいたしたい。

おわりに，本次調査にあたって御指導いただけた先生方の適切な御教示，地元の方々の御理解・協力，作業にあたられた方々の御骨折りのあったことを深謝したい。1か月近く自動車で片道1時間半の飯田―根羽の道を通い協力された牧内・福島両氏が調査の大きな力となったことを付記したい。

30日にわたって自動車を運転され，私たちの根羽への足となった中平兼茂さんは，その後，病に冒され57年5月2日不帰の客となられた。謹んで本書を中平さんの霊に捧げたい。

（佐藤甦信）

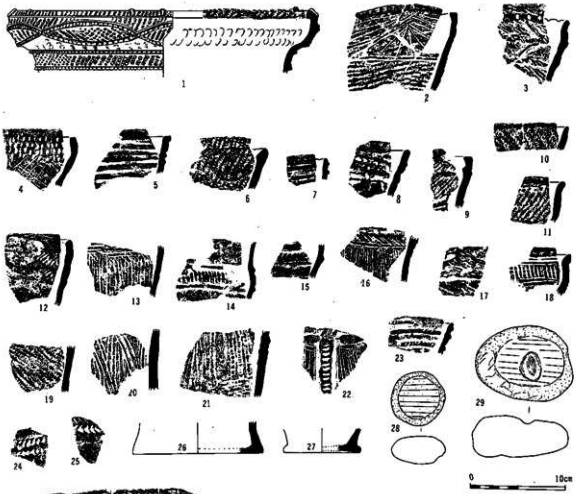


図28のⅠ　日影平32号住居址出土遺物（1：4）

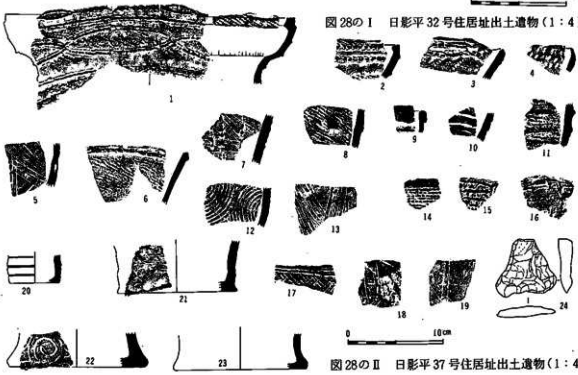


図28のⅡ　日影平37号住居址出土遺物（1：4）

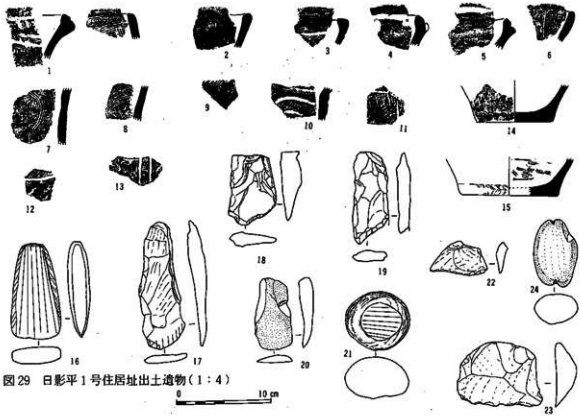


図29　日影平1号住居址出土遺物（1：4）

図30　日影平4号住居址出土遺物（1：4）

図31　日影平２号住居址出土遺物（1：4）

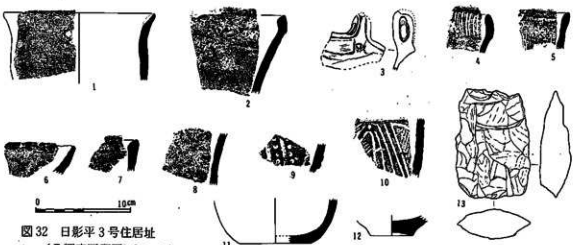


図32　日影平3号住居址
（Ⅱ調査区配石）（1：4）

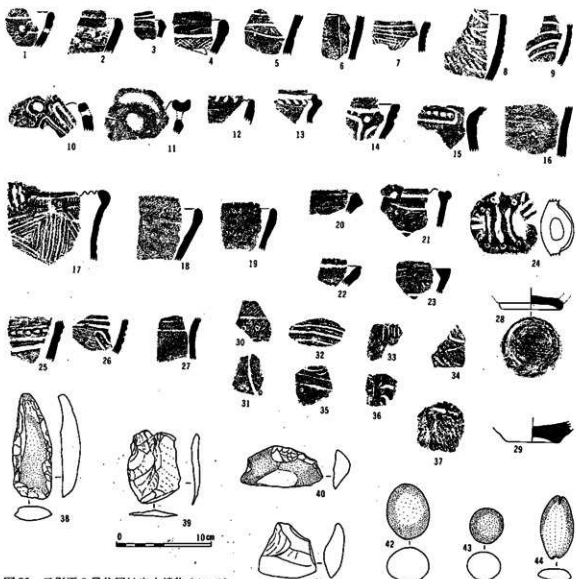


図33　日影平5号住居址出土遺物（1：4）
1～13・30～44…床，10～16…覆土下層，17～29…覆土上層

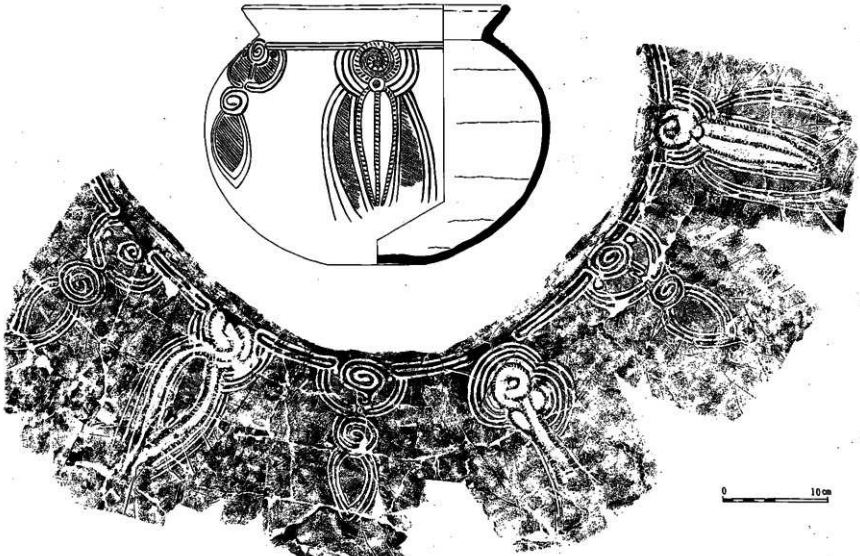


図34　日影平21号住居址出土遺物Ⅰ（1：4）

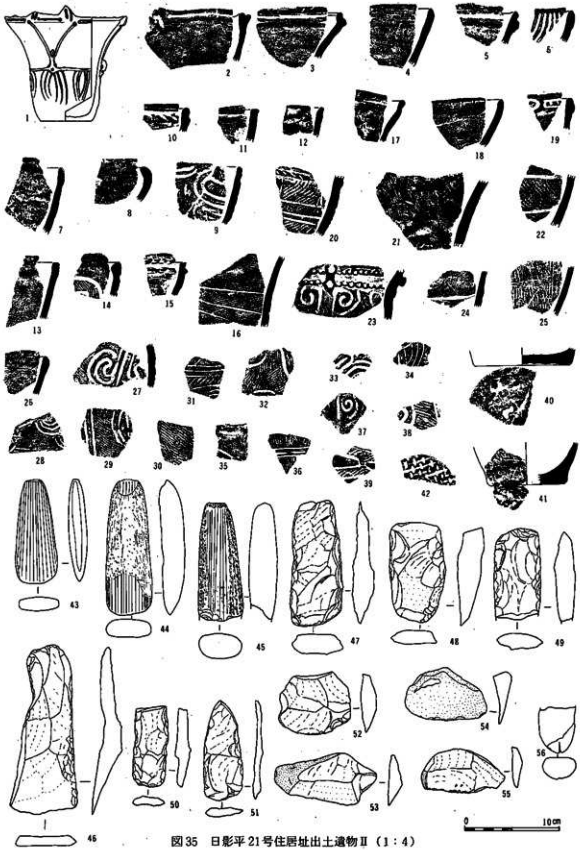


図35　日影平21号住居址出土遺物Ⅱ（1：4）

図36　日影平22号住居址出土遺物Ⅰ（1：4）
（床面）

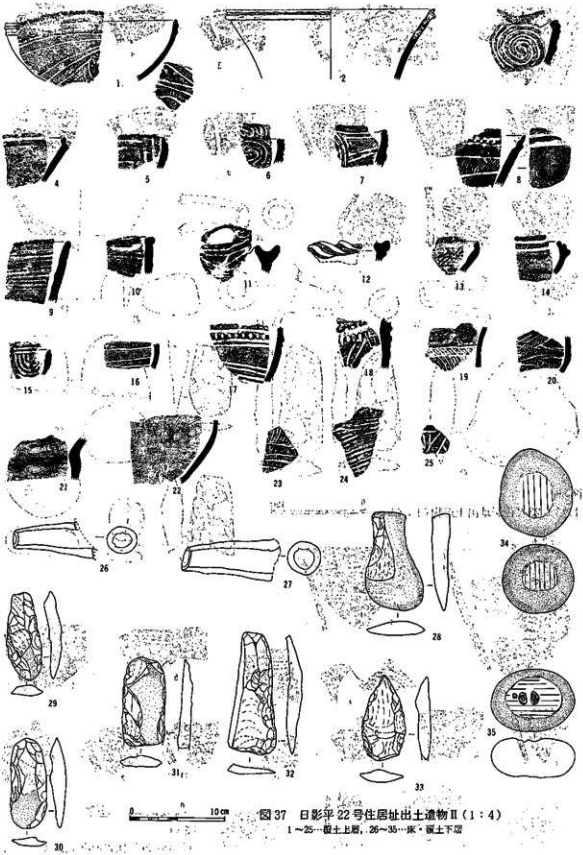


図37　日影平22号住居址出土遺物Ⅱ（1：4）
1～25…覆土上層，26～35…床・覆土下層

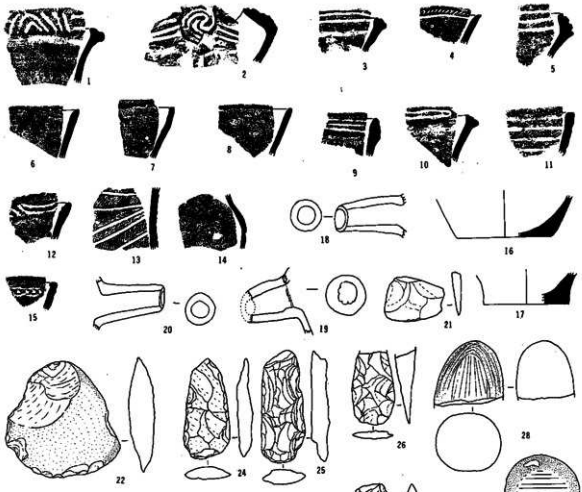


図38
日影平23号住居址出土遺物(1：4)

図39
日影平25号住居址出土遺物(1：4)

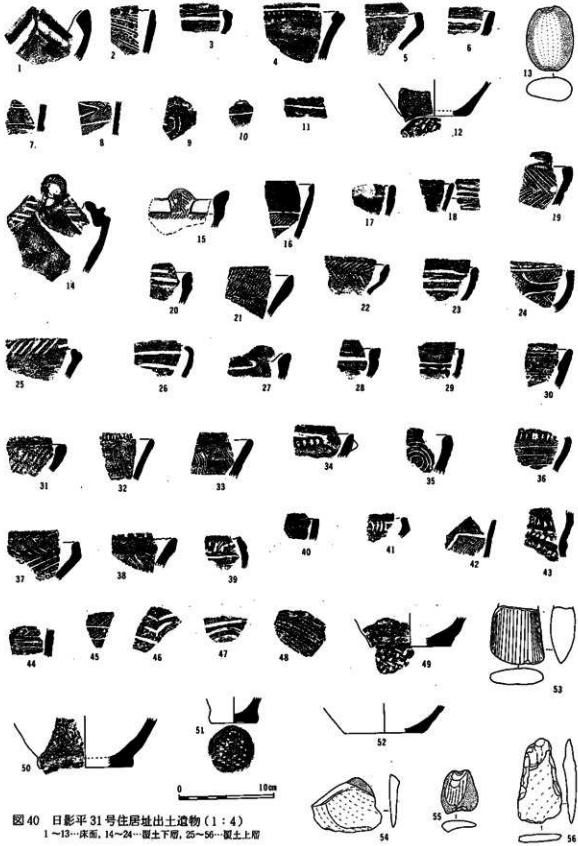


図40　日影平31号住居址出土遺物（1：4）
1～13…床面，14～24…覆土下層，25～56…覆土上層

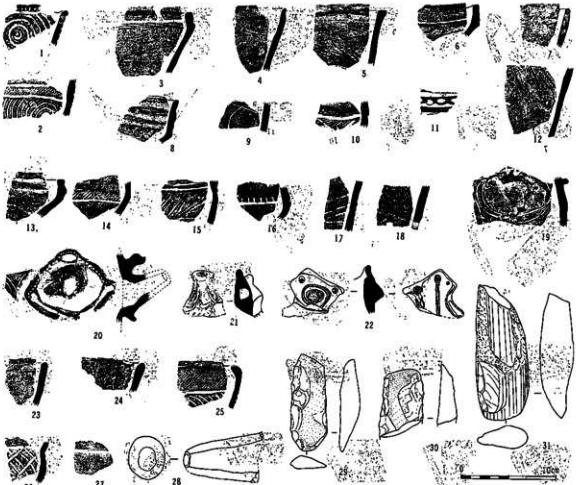


図41　日影平33号住居址出土遺物(1：4)
1～18・29～31…床，覆土下層，19～28…覆土

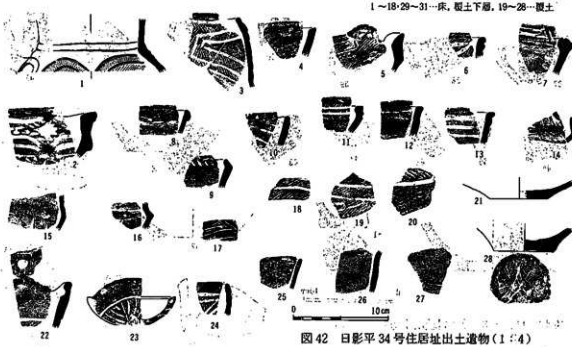


図42　日影平34号住居址出土遺物(1：4)

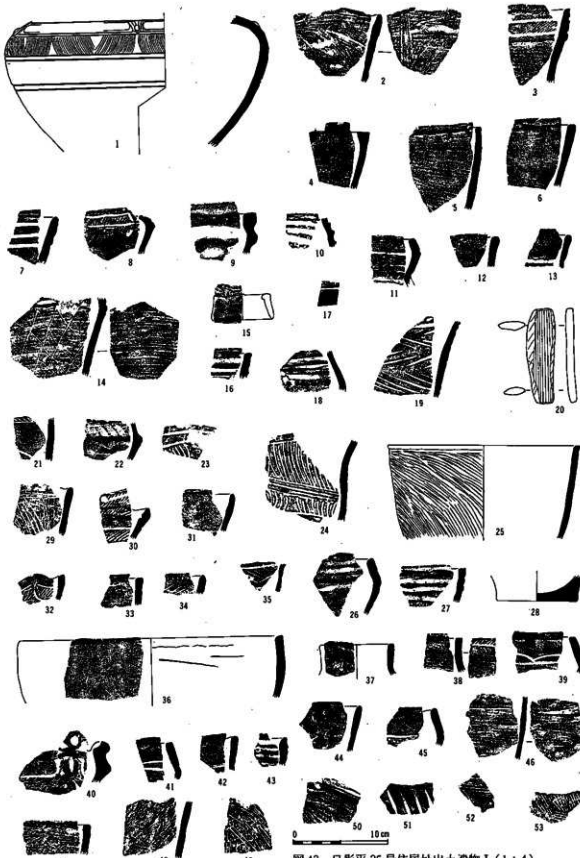


図43　日影平35号住居址出土遺物Ⅰ（1：4）
1～28…床，26～35…炉址，36～53…覆土下層

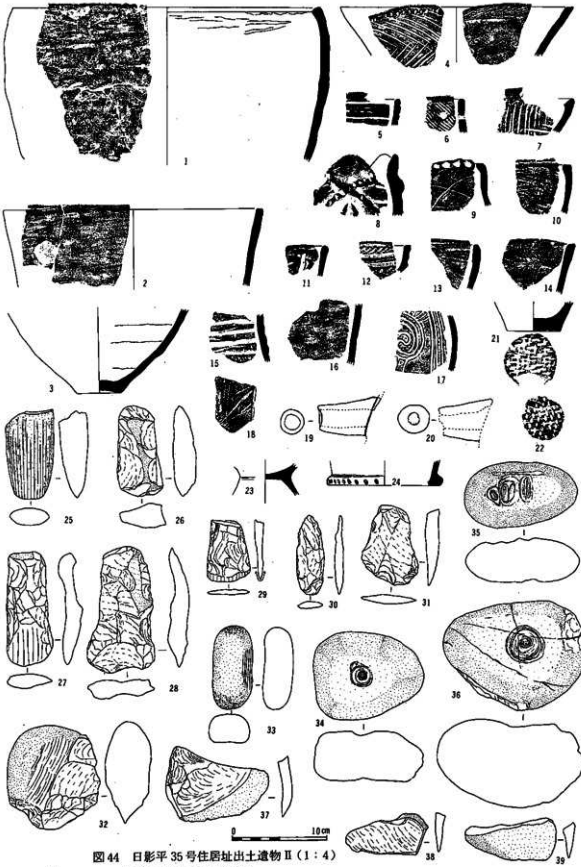


図44　日影平35号住居址出土遺物Ⅱ（1：4）

1～24…覆土上層，25～39…床

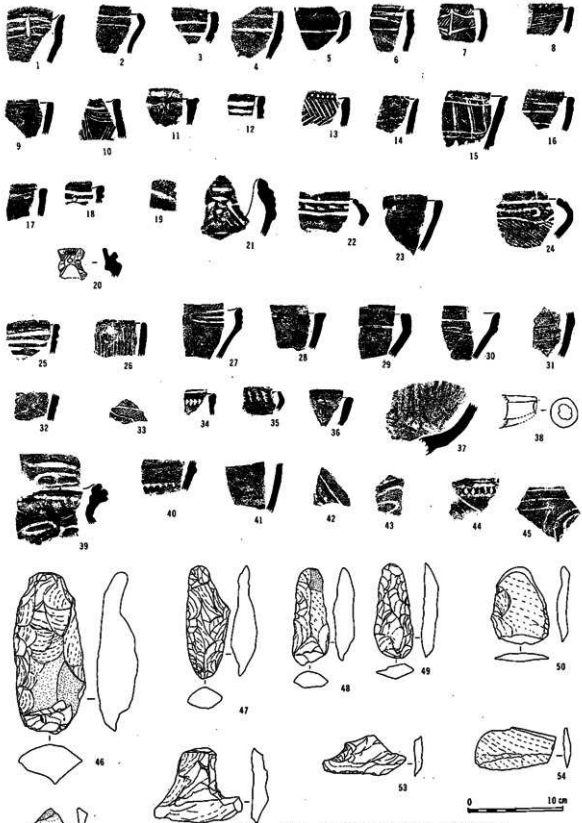


図45　日影平36号住居址出土遺物(1：4)
1～19・46～54…床，板土下層，20～45…覆土上層

図 46　日影平 38 号住居址出土遺物Ⅰ（1：4）

1～52…床，覆土下層

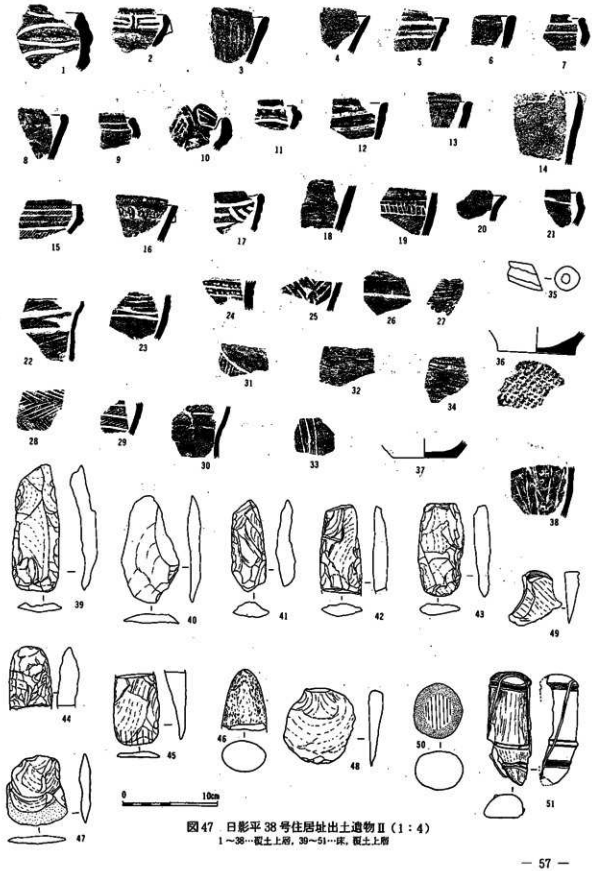


図47　日影平38号住居址出土遺物Ⅱ（1：4）
1～38…覆土上層，39～51…床，覆土上層

図48　日影平12号住居址出土遺物（1：4）
1～13・37～39…床，14～36…覆土

図49　日影平1南集石群出土遺物（1：4）

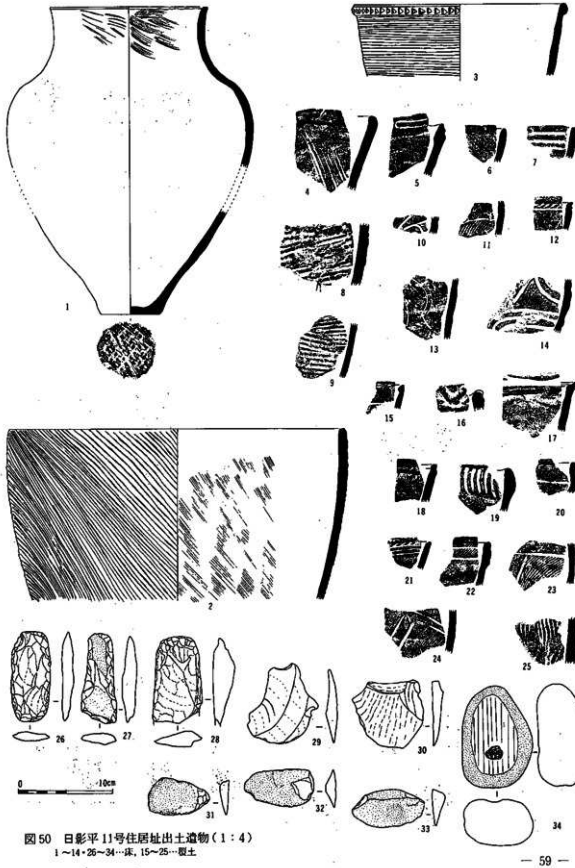


図50　日影平11号住居址出土遺物（1：4）
1～14・26～34…床，15～25…覆土

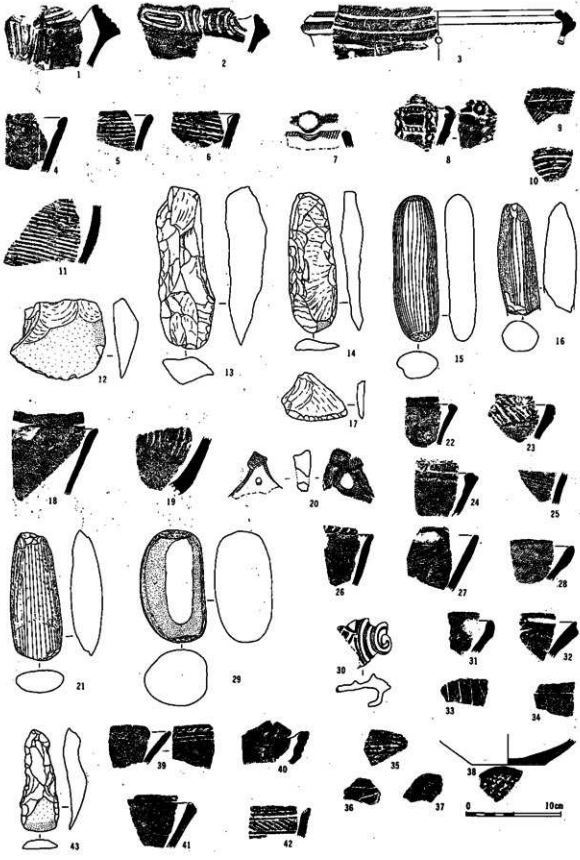


図51　日影平Ⅰ集石群，Ⅰ集石土坑出土遺物（1：4）
1～17…集石土坑35号，18～21…集石土坑29号，22～25…Ⅰ南東石群，
26～29…Ⅰ西縁集石群，30～38…集石土坑32号，39～43…集石土坑36号

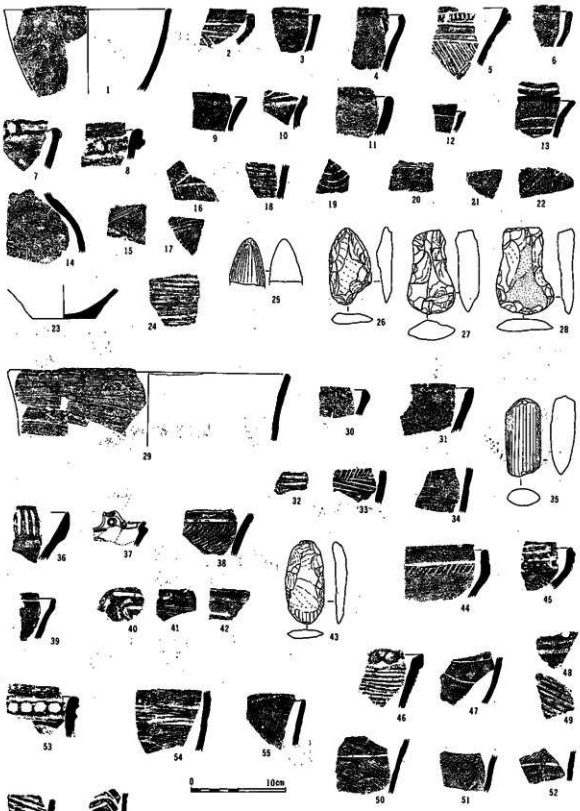


図52　Ⅱ集石土坑群上層，Ⅱ集石土坑，Ⅲ集石群出土遺物（1：4）
1～28…Ⅱ集石土坑群上層，29～35…集石土坑18号，36～43…集石土坑19号
44～52…集石土坑30号，53～57…Ⅱ集石群

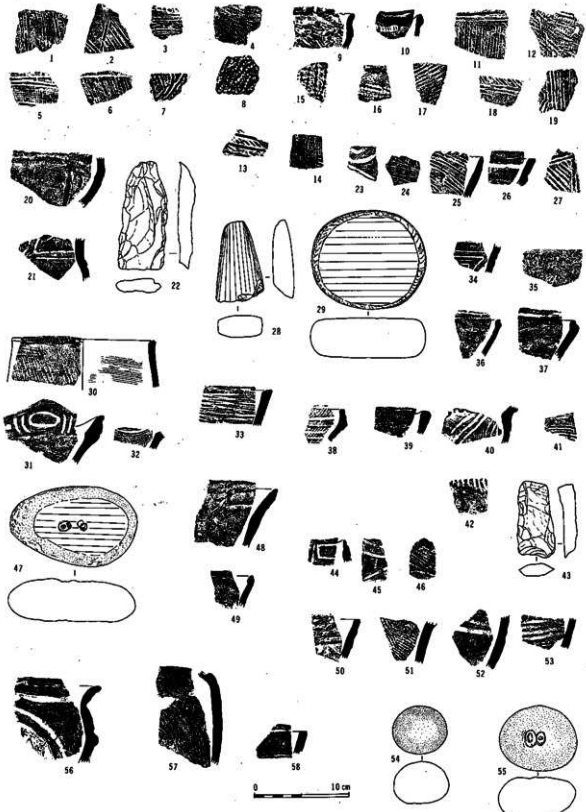


図53　日影平土坑出土縄文時代遺物（1：4）

1～8…±33，9～19…±34，20～24…±9，23～27…±11，28・29…±13，30～33…±15，34・35…±16，36～43…±17，44～46…±22，47…±23，48・49…±27，50～55…±31，56～58…38住東テラス

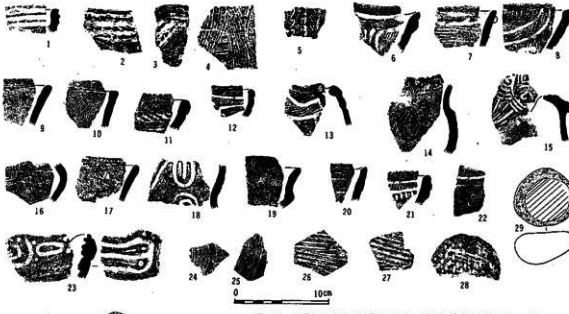


図54　日影平遺跡遺構外出土，縄文時代遺物（1：4）

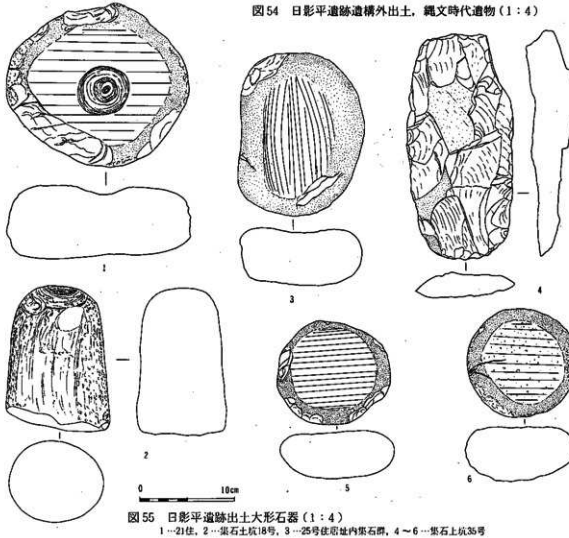


図55　日影平遺跡出土大形石器（1：4）

1…21住，2…集石土坑18号，3…25号住居址内集石群，4～6…集石土坑35号

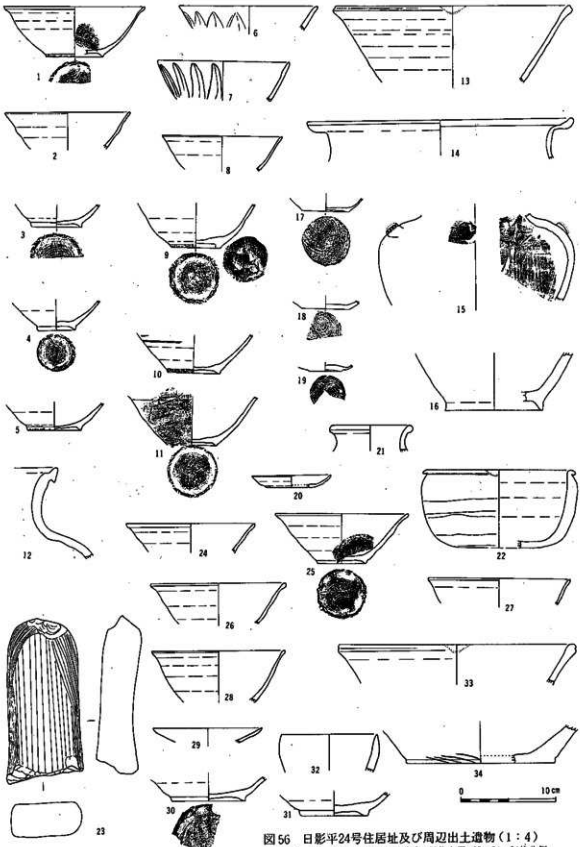


図56　日影平24号住居址及び周辺出土遺物（1：4）
1～23…24住，24～29…24住東・22住上層，30～34…24住北側

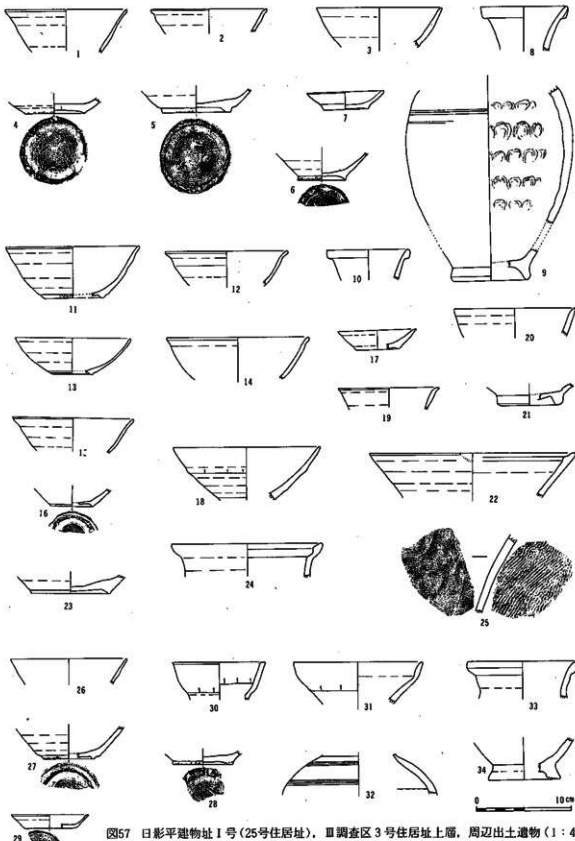


図57　日影平遺物址Ⅰ号（25号住居址），Ⅲ調査区３号住居址上層，周辺出土遺物（1：4）
1～25…住物址Ⅰ（25住），26～34…３住上層・周辺

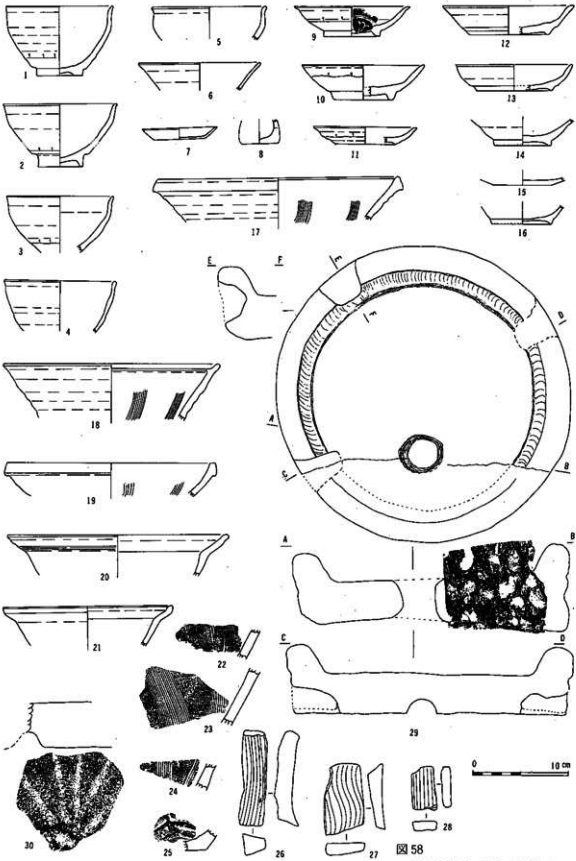


図 58
日影平建物址Ⅱ号出土遺物（1：4）

図59　日影平建物址Ⅲ出土遺物（1：4）

図60　日影平土坑出土遺物（1：4）
1…土4，2…土29上層，3～5…土6，6…土15上層
7…土31上層，8…土8

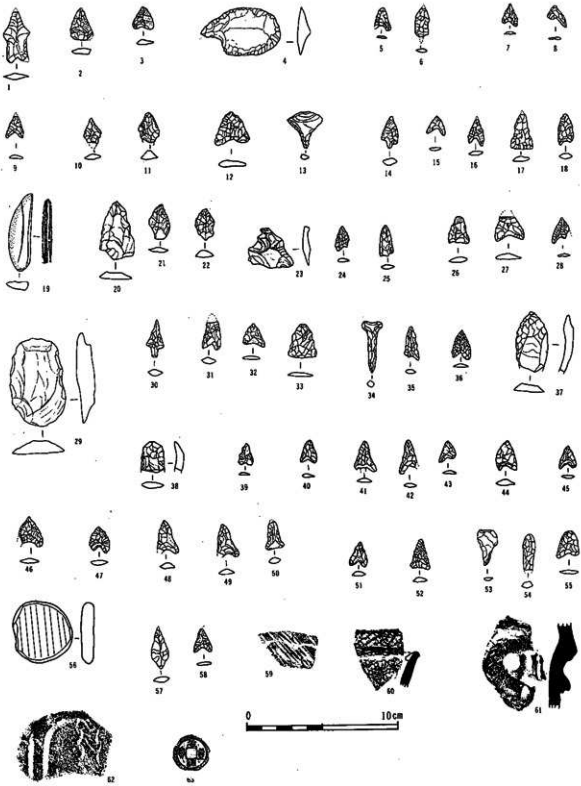


図61　日影平出土小形遺物及び混入土器片（1：25）

1…1住，2・3…2住，4…5住，5～8…21住，9…11住，10・11…22住，12・13…23住，14～18…Ⅰ区遺構外，19…12住，20～22…Ⅰ南集石群，23～25…Ⅱ集石群，26～33…Ⅱ区遺構外，34～37…31住，38～45…37住
46…32住，47…33住，48～50…34住，51・52…35住，53～55…Ⅳ区遺構外，56…土11，57・58用地外采集，
59～62…Ⅳ区上層，63…24住

I 遺　跡

全景……北東より

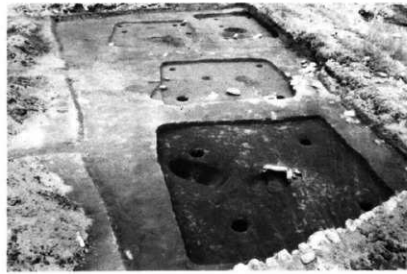
遺跡近景……西より。右の大木が月瀬の大杉

Ⅱ 遺 構

遺構全景……東より

Ⅱ調査区遺構全景……北より

Ⅰ調査区遺構全景
東より



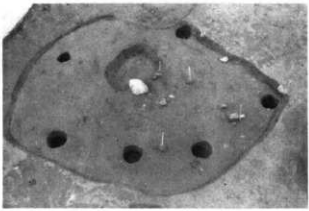
Ⅲ調査区遺構全景……南より

Ⅳ調査区遺構全景……北より

Ⅳ調査区遺構全景……南より

Ⅰ調査区上層集石群……東から

Ⅰ調査区上層集石群……南から



32号住居址

37号住居址　炉址

1号・2号住居址

23号住居址

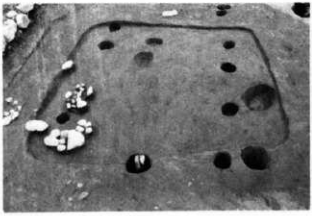
21 号住居址

22 号(下)・21 号住居址

21 号住居址　広口壺出

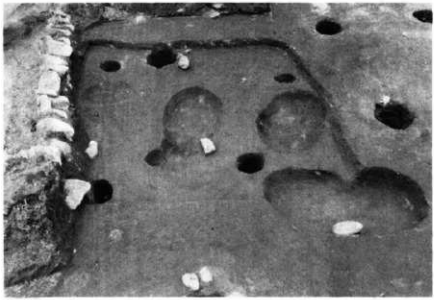
Ⅰ南集石群・24 号住居址

35 号住居址



12 号住居址

11 号住居址　深鉢出土



11 号住居址

33 号住居址出土　注口土器

33 号住居址出土　焼骨

集石土坑31号

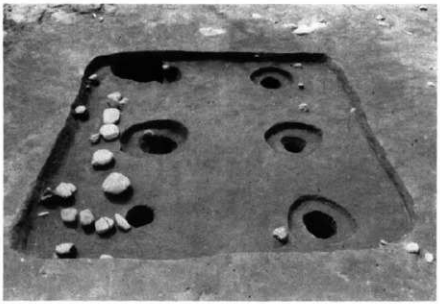
集石土坑31号　断面

集石土坑29号　断面

集石土坑32号

集石土坑18号　上部

集石土坑18号　断面



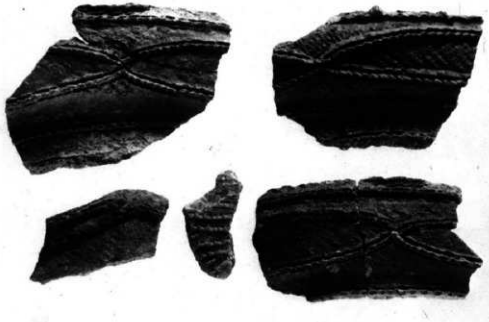
建物址Ⅰ号

建物址Ⅱ号……西より

建物址Ⅱ号　石臼出土

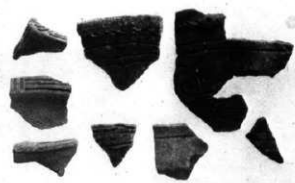
建物址Ⅱ号　鹿角出土

建物址Ⅱ号……東より

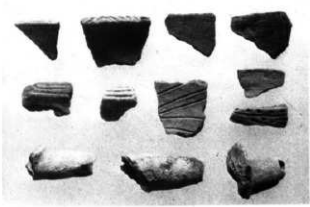


32号・37号住居址出土土器
（縄文前期末大歳山式）

32号・37号住居址出土土器（縄文前期末）



25号住居址南集石出土土器（縄文後期前半）



23号住居址出土土器（縄文後期前半）

2号住居址出土土器（縄文後期前半）

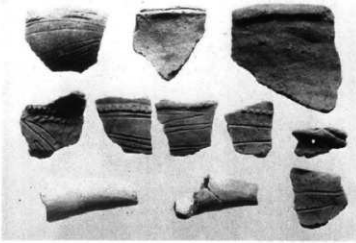
21 号住居址出土　広口壺
（縄文後期堀之内式）

同一個体

同一個体

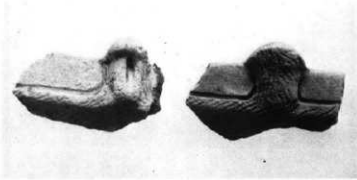
同一個体　文様の一部

21 号住居址出土　小形深鉢（縄文後期堀之内式）

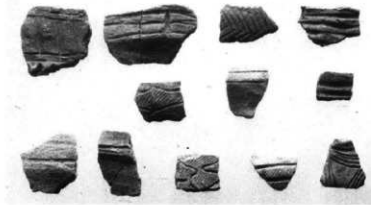


縄文後期後半土器

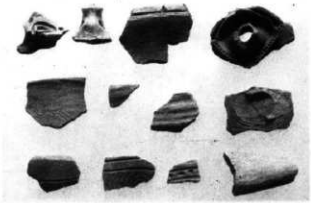
縄文後期後半巻貝形土器（土坑32号出土）



22号住居址出土土器（縄文後期後半）

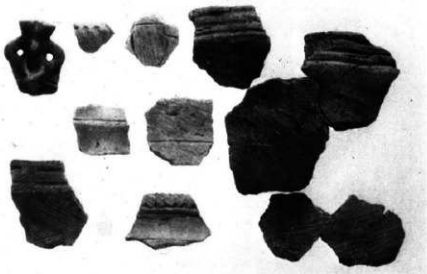


35号住居址出土土器（縄文後期新）

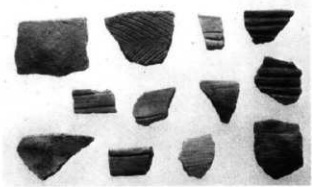


33 号住居址出土土器（縄文後期終末）

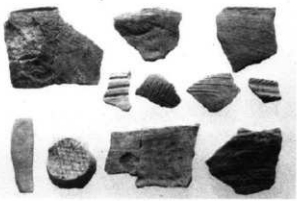
35 号住居址出土土器（縄文後期終末）



35号住居址出土土器（縄文後期終末）



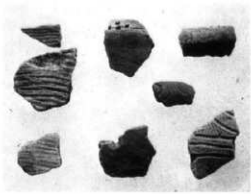
35 号住居址出土土器（縄文後期終末）



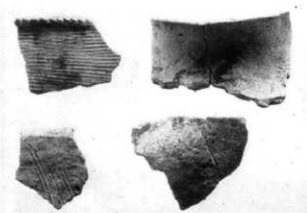
35 号住居址出土土器（縄文後期終末）
左下　扁平半月形磨製石器

縄文晩期土器　1 南集石群出土

縄文晩期土器　集石土坑群出土

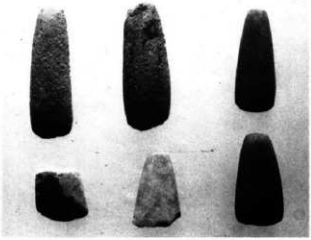


縄文晩期土器　12号住居址出土

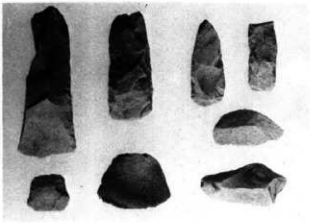


縄文晩期土器　11号住居址出土

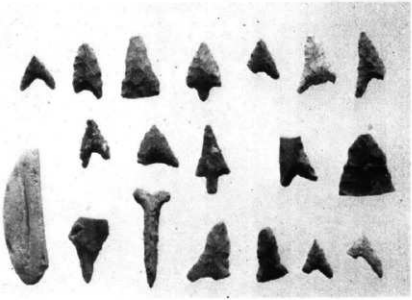
縄文晩期土器　11号住居址出土



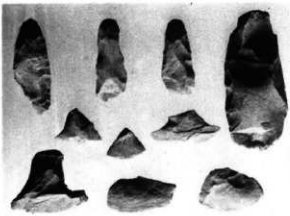
磨 石 斧



21号住居址出土　打石斧・横刃形石器



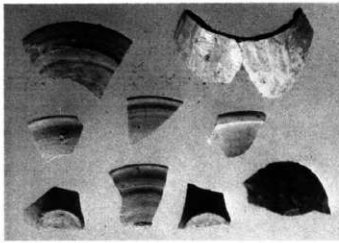
石鏃・石錐・ポイント・小形砥石



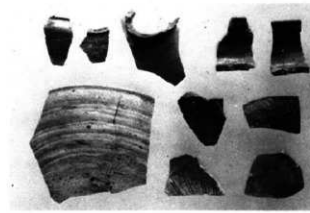
36号住居址出土　打石斧・横刃形石器

大形打石斧・凹石・磨石・敲打器

24号住居址出土　山茶碗　左下は四耳壺片



建物址Ⅰ号出土　古瀬戸・山茶碗



建物址Ⅲ号出土　中世陶器片
右4個は中津川窯大甕片

建物址Ⅱ号出土
天目茶碗

Ⅳ　発掘スナップ

調査にかかる

遺構検出

月瀬大杉と作業員の一部（昼休みに）

23号住居址調査

根羽中学生全員調査に参加

調　査　組　織

1. 日影平遺跡調査委員会

石　原　滋之助	根羽村教育委員会委員長
松　下　五四夫	根羽村教育委員
松　下　仁　志	〃
大久保　藤　一	〃
菅　沼　真佐人	根羽村教育長

2. 調　査　団

団　　長	佐　藤　甦　信
調査員	石　原　正　義
〃	浅　井　舎　人
〃	牧　内　住　子

3. 事　務　局

佐々木　秀　彦	社会教育主事

4. 作　業　員

福　島　明　夫	中　平　兼　茂	北　村　重　実	熊　谷　竜　尾
熊　谷　ち　ゑ	菅　沼　武　一	菅　沼　まさを	鈴　木　一　夫
鈴　木　たまき	鈴　木　やよい	三　浦　愛　基	鈴　木　忠　雄
浅　井　　勝	浅　井　茂　文	石　原　長治郎	石　原　忠　男
片　桐　正　一	片　桐　一　臣	片　桐　正　憲	石　原　藤　雄

5. 遺物整理・製図

佐　藤　いなゑ	田　口　さなゑ

日　影　平

— 縄文時代後・晩期，
中世を中心とした —

1983・3

長野県下伊那郡根羽村教育委員会

印刷　株式会社　秀　文　社